

調査報告

鬼師の世界

——黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)——

高 原 隆

Abstract

The second group of ogre-tile makers of “Kuroji” in Sanshu is the group of ogre-tile makers of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro Line. This group has two founders in contrast with the Yamamoto Kichibei Line which was founded solely by Yamamoto Kichibei. These two persons are Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro. The relationship between the two is that of master and pupil as well as uncle and nephew. Iwatsuki Sentaro is a master of Kamiya Haruyoshi as an ogre-tile maker who is called “Oniitashi” in Japanese. Sentaro went to Enshu for the purpose of becoming an ogre-tile maker, so his style of ogre-tile making is that of Enshu, which is different from that of the school of Yamamoto Kichibei. Kamiya Haruyoshi went to see Sentaro, and became his pupil in Enshu. However, Haruyoshi went back to his hometown, Takahama, and founded an Oniitaya : a workshop of ogre-tiles. Two or three years later Sentaro also went back to Takahama, and started another new Oniitaya. Therefore, a sort of confusion happened concerning who is the real founder of this line because most people do not know the relationship between the two masters. As both sides claim to be the founders of the line, I consider the two founders together according to the actual context of ogre-makers in Sanshu. However, when I consider the origin of the style of this line, I think that it is Iwatsuki Sentaro who is the actual founder.

Therefore I have delineated the whole picture of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro Line. Though the real founder is only one person, Iwatsuki Sentaro, the reality is that two groups of Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro coexist in Takahama. They are not completely different from each other, but rather closely related not only in the aspect of ogre-tile making style but also in that of blood. I found that there existed several intermarriages between the two groups. In this sense both groups have been interwoven rather tightly in terms of the ogre-tile school making as well as in ancestry.

Next, I will discuss the relevant contributions of the Kamiya Haruyoshi and Iwatsuki Sentaro line to ogre-tile making. The main contribution of this line as a whole is an introduction of a plaster mold into the world of ogre-tile makers. It was in the 1920s, immediately after the earthquake disaster in Tokyo on September 1, 1923. Traditionally, ogre-tile makings were hand-made. However, as it took a long time to make an ogre-tile, a plaster mold was introduced for the purpose of mass production, especially for the reconstruction of Tokyo.

三州鬼瓦を生産する黒地の鬼板屋の第2グループが神谷春義・岩月仙太郎を元祖とする鬼板屋群である。山本吉兵衛系の鬼板屋群の場合、元祖は山本吉兵衛その人であり、はっきりしている。ところがこの第2グループの場合は話が少し込み入っている。それ故に元祖を1名ではなく神谷春義と岩月仙太郎の2名とした。

岩月仙太郎と神谷春義は叔父と甥の關係に当たる。叔父の仙太郎が慶応3年(1867)生まれであり、甥の春義は明治11年(1878)生まれである。遠州(現在の静岡県西部)や甲州(山梨県)で旅職人として鬼板師の技術を磨いていた仙太郎のところに春義が、弟子入りし、鬼板師の修行を始めたのであった。結果、仙太郎と春義は師弟の關係に当たる。ところが神谷春義は技術を習得すると仙太郎よりも先に高浜へ帰り、「鬼源」という鬼板屋を興したのである。遠州辺りの鬼板の技術と流儀が仙太郎を通して春義へ伝わり、さらに春義を経由して三州へと、山本吉兵衛系とは違う鬼板の流れが始まった訳である。もし仙太郎がそのまま遠州に留まっておれば、春義が第2グループの流派の元祖となるはずであった。ところが仙太郎は長い旅職人生活を終え、高浜へ帰郷し、「鬼仙」を始めたのである。

鬼の流儀や技術は仙太郎が遠州各地で旅職人をしながら総合的に体得したものであることは明白である。しかし、それを受け継ぎ、最初に高浜へ伝えたのは春義である。それ故に、「鬼源」系と「鬼仙」系の間に元祖についての感情的なもつれが在るのは否定できない。その事を良く表している話が、「鬼源とは何ぞや」であろう。「鬼源」の初代は神谷春義なので、鬼屋の屋号は三州における命名の慣行から行くと、「鬼春」であるべきなのだが、「鬼源」なのである。これは初代の春義に思惑があつて、「我こそは鬼の源なり」と自ら主張して「鬼春」とせずに「鬼源」としたという風聞による。こうした話が存在すること自体が、元祖争いのある証拠になる。事実はこの話の通りではなく、神谷春義は元々、神谷源之丞という名前であり、源之丞は「鬼源」を立ち上げてから、ある時、何かの事情でもって、「源之丞」から「春義」に改名したのである。

以上のような事情により、ここでは第2グループを「黒地：神谷春義・岩月仙太郎系」とした。その内訳は、神谷春義に端を発する鬼板屋として、鬼源、(有)上鬼栄、サマヨシ製鬼所(現在は存在しない)、鬼長がある。さらに白地組合に所属する同系列の鬼板屋が、笹山製鬼所、鬼明、鬼富、鬼彌、シノダ鬼瓦である。一方、岩月仙太郎系に属する鬼板屋は、鬼仙、鬼作があり、また白地組合に所属する石英がこのグループに入る。ここでは便宜上、黒地の鬼板屋のみを扱い、白地の鬼板屋は白地の世界を描く時に、一括して紹介する。

[I] 神谷春義系——鬼源、(有)上鬼栄、サマヨシ製鬼所、鬼長 (白地：笹山製鬼所、鬼明、鬼富、鬼彌、シノダ鬼瓦)

神谷春義の系列は調査を開始した時点(1999年)では10社在ったが、2003年8月現在で

は、サマヨシ製鬼所が営業を停止して、9社になっている。三州鬼瓦白地製造組合には笹山製鬼所、鬼明、鬼富、鬼彌、シノダ鬼瓦の他、鬼長が入っている。またサマヨシ製鬼所も白地組合に入っていた。現在、黒地の三州鬼瓦製造組合には鬼源、(尙)上鬼栄、鬼長が入っており、サマヨシ製鬼所も元メンバーであった。ここでは旧サマヨシ製鬼所を含めた黒地の4社について記述する。

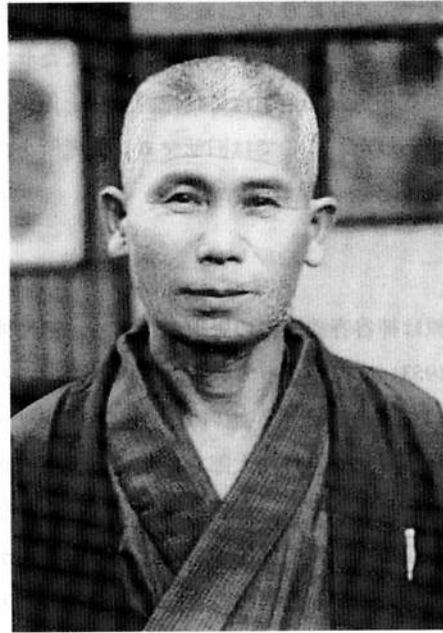
鬼源

一説に「鬼の源」^{みなもと}といわれる鬼源は神谷春義直系の鬼板屋である。初代神谷春義は明治11年(1878)に生まれ、昭和28年(1953)に亡くなっている。享年75歳であった。春義の父親は船乗りであった。しかし、春義は船乗りの仕事が嫌いで、長男であったにもかかわらず、次男に家督を譲り、船を降り、遠州へ叔父の岩月仙太郎を頼って鬼板師の修行に出掛けたのである。遠州での話は残念ながら伝わっていない。春義は遠州から帰ると高浜に『鬼源』を興し、鬼板屋になったのである。春義には6人の兄弟があり、その内5人が男の兄弟であった。そして春義の「鬼源」へ何と三男の栄吉と五男の長之助が小僧として入っている。この事から鬼源が春義の指導のもとで急成長していったことが窺える。後に春義の弟である栄吉は独立して鬼板屋を開く。屋号は「鬼栄」になるはずであったが、当時高浜にすでに同名の鬼板屋があり、栄吉は屋号を『上鬼栄¹⁾』としている。同様に五男の長之助も独立を果たし、『鬼長』を始めている。結果、この3軒の鬼板屋が鬼源系の礎を築くことになる。鬼源の発祥の地は現在の大山公園の直ぐ前にある地(春日町3丁目8-8)ではなく、少し離れた青木町4丁目7-7にあった。三代目博基はこの件について次のように言っている。

昔はここで(遠州)修行して来て、こちらへ(高浜)帰って来て、それでここで(現在の鬼源)やったわけではないですけど、1キロ半ぐらい向こうに、もと屋敷がありまして、まあ親父の兄弟皆分けましたので、それが親父(春義)の弟の処へ行っとなりますけど、そこで最初商売やったです。それからたまたま儲けた金でこちらに越してきて、ここに(春日町)現存している訳ですけどね。あとは全然伸びんで。まあそんなところが原点ですわ。

春義は博基が16歳で高校へ行っている時に亡くなっている。ところが博基は春義が鬼板師として働く姿を知らないのである。「実際に春義さんが作っていたところを見てるんですか」という問い掛けに博基はこう答えている。

いや、作っとるところ一切見ておりません。全然、あの一、何にも見ておりません。窯炊くところも一切。親父(勝義)がやっとるところは見ておりますけど。爺さんがやっとる



第1図
初代鬼源 神谷春義

ところは見てません。

いやあ、何にも理由無いです。健康は健康でしたけどねえ。うーん。まあ、職人が当時よけ居ったし、あまり、売れんかったし、そう手だいてもしょうがないて事じゃなかったですかねえ。

博基の記憶によると、祖父春義はほとんど、玄関先の火鉢場に座っていたという。火鉢を抱くようにしていたらしい。春義は博基へ次のようにいつも言っていたという。「腕さえ持ったりゃー、生きてくれる。」「三河で、日本、あの一、一番になれば全国で一番だ。」その他にも博基は春義の言葉を父、勝義から聞いて覚えている。(第1図参照)

親父(勝義)が習った時、あのう、何てとったかなあ。うーん。「親子は敵^{かたき}」のような事を言っとったけど。そういう意味のことをお爺さんがよう言いよったって事を、よう言っとりましたね。

博基は春義のその言葉を説明している。

「親子は鬼みたいな風に成れ」っていうことをよく言っとったらしいですけど、ほいだで、親より上にいかにゃーいかんってゆうような事の意味かなあ。



第2図
鯉巴蓋 神谷春義作

孫に当たる博基に対しては優しくかったという。ところが、直接の息子の勝義に対しては、かなり厳しかったらしい。「親子は敵」を実行していたのである。(第2図参照)

先代(春義)はね、親父(勝義)が話したけど、無茶苦茶で、作るもんは気に入らないと、足で踏んづけちゃう。あの、封建的な爺さんだったそうですよ。それで、うちの親父がそれで作っているでしょ。それで出来が悪いと黙って踏んでっちゃうそうです。キュキュキュッて。

それで、反省してまたやり直す。それで、あまりうちの先代が誉める、誉めるって事をしなかったそうです。とにかく気にいらんもんは全て踏んづけて黙ってサッサと引き上げるというそういうやり方で親父は勉強してきた。

職人に対してはこうした事はしなかったと博基は言っている。自分の子には春義の常日頃言っていた言葉通り、「鬼」のように接していたのである。

第二代鬼源、神谷勝義は親方である春義からこのように厳しく仕込まれて鬼板師になった。勝義は明治41年(1908)生まれで、平成5年(1993)に85歳で他界した。勝義は当時鬼源が景気の良い時であったこともあり、高等小学校を卒業して、直ぐには鬼板師の世界に入らず、全寮制の瀬戸窯業学校で5年間学んだのである。博基は次のように言っている。

まあ、全然一刻さは無かったね。ほいから、先がよく見えたね、やっぱり、本当に。化

学符号は全部読めましたね、英語もほとんど。あの一、ちいとぐらいしゃべりよったでねー。

瀬戸窯業を卒業すると、その頃は就職に関しては引っ張りだこだったそうであるが、勝義は春義の「鬼源」へ入った。勝義が20歳頃の出来事である。春義には3人の息子があったにもかかわらず、勝義のみを鬼板師にしている。すでに春義は自分の弟2人（栄吉と長之助）を職人として育てており、その事に関して色々と問題があったことが影響している模様である。

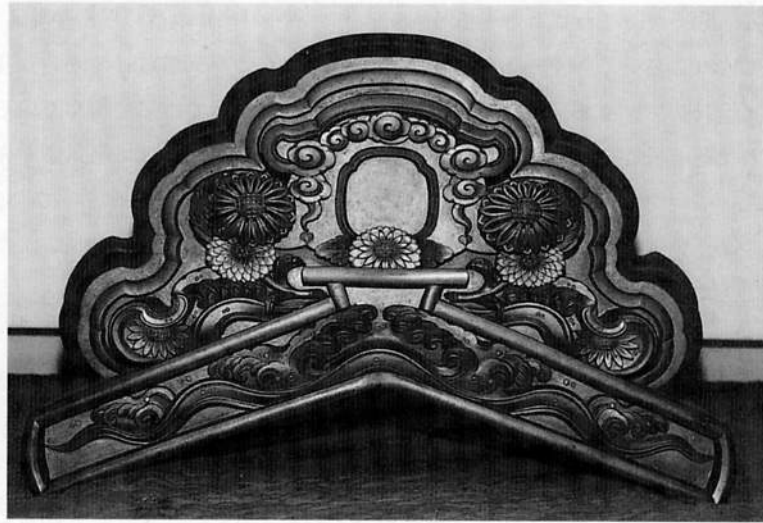
うちの爺さん（春義）も、兄弟を仕込んで凝りとるもんだ。爺さんも男の子がまんだ二人有りまして、もう絶対爺さんは「兄弟で同業にはせん」ってことで。「うちの家一人あやあいい」ていうことで。

このように結果として春義は直系の鬼板師を二世代に渡って育てたことになる。それが弟の栄吉であり、長之助であり、長男の勝義であった。勝義の場合はわざわざ瀬戸窯業学校へ行かせており、当時の数少ない日本の窯業学校へ勝義を送り込み、一種の英才教育を施したと言えよう。それ故に春義は勝義に対しては「鬼」のように厳しい親方であったのである。

勝義の最大の貢献は石膏型の技術を「丸形」という形で初めて考案し、広めたことである。瀬戸窯業学校での技術が実際に鬼源の現場で適用され、やがて他の鬼板屋に広まったのである。博基によるときっかけは大正12年（1923）9月1日の関東大震災であった。被害世帯は69万に及び、三州を大地震の余波として突然の鬼瓦の大需要が襲ったのである。博基が次のように言及している。（第3図参照）



第3図
第二代鬼源 神谷勝義



第4図

三重影盛菊水模様立波台付 神谷勝義作
高浜市かわら美術館3F 展示

関東大震災の時にね、もうこんなもん、手で作っとっちゃあ間にあわんってことでね。ほいで、もうとにかく「丸形」って言うですけど、それを作らにゃあ駄目だってことで、ええ。それが売れて売れて、まあ、どえらい売れたそうですわー。まあ、当時職人も手が、わりに揃っとったもんだで。まあ、今作っとるのは、みんな、うちから広がったですよ。ほとんど、「丸形」に関してはね。

このように勝義は鬼瓦業界に対して重要な貢献をしている。しかし、鬼源では、親方としてやり方が上手くなかったと博基は言っている。先見の明があるにもかかわらず、投資をなかなかしない性格だったらしい。(第4図参照)

その、紋を開発したときでも、もう、自分でとにかく金使わんで、窯築いちゃわにゃあいかんってことで、紋の窯も自分で築いちゃって、紋焼くだけの窯を。ほいで紋焼いとったですけど。

矢っ張り、いっくらこんな小さな窯でも、あのバーナーで硝煙式で焼くと、下60パーセントしか矢っ張り焼けませんわ。ほいで、上40パーセント焼けません。ほいで、こっちを焼き過ぎちゃうと、こっちは丁度良いだけどー。(笑い)

そう言う事で、あの一、難儀しとったですけどねえ。僕も、あんまり親父に金使わしちゃ

ああかんと思って。そうこうしとるうちに、トンネル（窯）の番頭さんが見えて、「鬼源さん、こんなとろいことやっとなっちゃいかんで、直ぐに電気窯買って来い」って言われちゃって。ほいで、まあ、その足で、ついでに僕、名古屋で電気窯頼んで。その頃から親父連れて行きながら始終出入りしとったところがあって。ほこに電気窯も売ったもんだん、ついでに電話して、「とにかく早、電気窯入れてくれ」ってって。ほいで、電気でややあ、窯調子がいいもん。矢張り100パーセント焼くと。あー、これなんかあかんってことで。

ほんだでねえ、金儲けは下手なんだわー。うん、先は見えとるだけど、資本を降ろさんってことでね。

勝義は金をかけずに、全て自分で可能な限り作ってしまう人だったようだ。出来るには出来るが一級品があまり出来ず、売り上げに結びつかない事が多かったわけである。博基は父、勝義の思い出として残っていることは、毎晩酔った勝義から聞かされた、第二次世界大戦前の不況の話だという。

（不況の話を）1日も欠かさなかったよ。一緒に食う時は。第二次世界大戦の前の不況が、もうここみんな工場変えちゃったでね。親父が全部。（鬼瓦屋から茶碗工場へ）ほいつをまた返^{かや}いて貰うに、親父難儀したでねー。ちょっと裁判かけてねえ。なかなかほいで返してくれなかった。

そして勝義は次のように良く言ったという。

歴史は繰り返されるぞ。

博基には現在の鬼瓦業界の不況が勝義の毎晩の不況話とダブって見え、勝義の声がよりリアルに驚きを伴って木霊しているのであった。

鬼源の第三代目が神谷博基である。昭和12年（1937）生まれで生粋の高浜育ちである。博基は小さい頃の思い出をこう語っている。

幼い頃の僕も友達が沢山おりました。ほとんど小学校時代は夏休みは、ほとんど、この近くの海がございまして、その海でまあ夏休み過ごした覚えがあります。まあほとんど魚釣りとか海水浴とかいうことで、まだ海は現在より非常に綺麗でしたので、まだ十

分泳げる状態でしたので、夏休み中は海で過ごした思い出があります。

冬は何やったかっていうとあまりやりませんでしたけど。ほとんど家業が人手不足ということで、あの「跡取りやらせにやいかん」ということで、親父が徹底的に言ったもんだで、うちの業をいろいろ手伝っておりました。

ところが博基の子供の頃は戦争中であり、上記のように夏は海で遊び、冬は家業を手伝うといった平穏な日常生活の中に異常な世界が重なり合って、日常と非日常の世界が同時進行する奇妙な世界を織り成していたことがわかる。

戦争中一番空襲が激しかったのは小学校2年生の時でしたね。2年生の時で、まあ夏から冬にかけて、艦載機がよく飛んできて、あの、その上からババババババババッとその艦載機があの機関銃を撃つとった思い出があります。僕も海で遊んどって、あの、ススキの藪の中へ隠れた経験もあります。まあ、それ、見つかると撃たれちゃいます。

ものすごい超低空で飛んでくるもので。完全に見つかれば撃たれちゃうもので。(笑い)それで、この公園(大山公園)、ここの前の公園でも、まあ、あの、戦争に行かれる方が始終ご祈祷されて行かれることがあるんですけど。日本の国旗のあの金の球、上ついたりしますが、あれ、艦載機がかなり撃って割れたのを見ております。超低空で飛んできて、まあ、必ず空襲警報が、あの、役場のサイレンが空襲警報っていう形で出す。まあ、注意はしとるんですけど。そういうものすごい怖い、今でも思い出があります。(笑い)

鬼源では戦時中はやはり鬼の需要が無くなり、他の鬼屋と同様に転業している。博基はその辺りの事情を次のように述べている。

ここは工場を全部変えちゃいましたもんね。うちは。茶碗作っとなります。食事をする時の茶碗をね。ここで全部。窯も5、6基在りましたね、ここに。ここも、或る程度遊び場でしたけど、隠れん坊する。(笑い) 登り窯もあったんですよ。

博基は鬼瓦の一つの根本的な特徴を、戦時中に起こった鬼瓦から茶碗への転業に関連して語っている。

この瓦屋っていうのが、平和産業ですので、家が建たん限りは必要無いもんでね。家も建たんで、戦争前はものすごく不況が続きましたもんね。それで、その不況の関係で、

あの、職人さんも一人ずつ辞めてかれて、在庫、ものすごい山になっちゃって、家のほう。その在庫で戦争中は売り食いしとったですけどね。

茶碗はね、全部貸して、他の会社（三河窯業）に貸しちゃってね。あの工場、本宅だけど、あと全部貸しちゃったです。

このように、鬼瓦は平和産業の象徴である。一見、「鬼」というと、戦乱の時代でこそ、かえってても囃^{はや}されそうな語感を持つのであるが。また鬼瓦を生産する鬼板屋は鬼瓦の需要が零（ゼロ）になると、何らかの粘土に関連した産業に転化することがこれまでの様々な事例からわかる。言い換えると、鬼瓦産業は他の粘土関連産業と強い親近性を有している。つまり、その基層に汎粘土文化が存在しており、この地方の一つの特色となっている。それを私は「三河粘土文化圏」と呼んでいる。

さて博基は中学校を卒業して、刈谷高校の定時制へ行っている。この辺りの経緯が現在に至る鬼板師の世界と直接に関係してくる。

高校はね、親（勝義）が「行っちゃいかん」って言ったもので、「鬼板作るには全然高校必要無い」という事で、親父が。

中学で、僕はそんな勉強嫌いな方じゃなくて、好きでしたけど。親父が「そんな行かんでも良い」という事で。たまたま受け持ちの先生が「どうするのか」、「どこへ行くのか」って事を言われたんだけど、「すいません」って言って、はっきり言いまして。しかし、考えてみたら、今からの時代は高校教育最低でも。（笑い）嫁さんの来てもないし。（笑い）「定時制行かせてくれ」って言って。たまたま刈谷高校の定時制がありまして、まあ、そちらの方へ。

博基は父、勝義の強い意向を受けて、定時制の高校に通いながら、実質、中卒で鬼源に入り、鬼板師になるために修行を始めたのである。ただ、中学校を卒業して、いきなり鬼板の仕事を開始したわけではなく、博基は小学校の頃から手伝いをしながら鬼瓦の仕事を身につけていっていた。それ故、中学校を出てすぐ鬼板師になることは博基にとっては自然な成り行きであった。

まあ、もう親がその様に仕向けとったね。もう中学校から。中学時代から日曜日はほとんど僕、土を打ったりとか、そういう事で。もう毎週ほとんど日曜日はもう無かったですね、中学時代は。

まあ、あの、携わったのは小学時代からチョコチョコやりおったけど。中学入った時はほとんど日曜日は手伝わせられちゃってね。中学卒業するまで。当時職人さん沢山見えたもんでね。まあ粘土無くなるもんで、一週間にいっぺんずつ打ったもんだで。まあ、それに始終手伝わされて。日曜日を若い時にやったということは少ないですね。完全に日曜日は今みたいに遊ぶということはまず無かったですね。

父、勝義は博基を巧みに鬼板師の世界へ導いて来たにもかかわらず、実際に博基を指導することはあまり無かったらしい。博基は次のように言う。

当時は職人さん見えたので、うちの親父はあまり教えてくれんでね。(笑い) あの、職人さんに手取り足取り教えていただいてね。それでまあ、たまたま、ちょっとばかし分ですけど、完璧じゃないですけどやれるようになった。

まあ、親父は窯に追われちゃうもんで、職場はあまり入れんもんでね。職人さんが見えると、なかなか仕事場でやることはできんもんで。まあ、腕は遙かに良かったですけど、なかなか厳然と教えてくれなかったです。

博基は鬼板の技術をこのように、鬼源にいた職人から主に習得している。勝義は父、春義からの直接の厳しい指導に対する反動のためか、博基に対しては少し距離を置いていたように思われる。一方の博基は鬼板の技術について次のように言っている。

技術はその前(独立)にほとんど習得しておりましたけどね。高校時代にはほとんど。4年間に。

まあ、ほとんど大丈夫。親父、「注文がありゃ、あいつがやる」って、図面描いてくれるだけ。親父があまり仕事が好きじゃなかったもんだで、バリバリやる方じゃなかったもんだで。僕が先頭切ってほとんどやっとなもんだで。もうその頃、技術は習得しちゃいましたよ。4年間でね。

博基は直接には、鬼源に当時いた職人深谷定男から習っている。博基にその事について尋ねると次のように答えてくれた。

当時は、あの一、手造りじゃなかったもんですから、もう、はい。石膏型があの一、関東大震災の時からうちの親父が石膏型というのを開発して、それであの一、一応「磨く

ことをまず覚えにやいかん」ということで、ほいで、あの一、磨く事からまず教えていただいたですけどねえ。

博基は次のように続けて言っている。

親父も最初は、全部は教えてくれん訳じゃなくて、ある程度のことは、ほや、教えて貰っただけど。まあ、主体は、あの一、職人やっておられた、深谷定男さんて方からまあ、習った、教えていただいたわけですけどね。

磨くことをまず教えていただきました。型を起こしたやつを。それが一番最初です、はい。

うん、まあ、磨くこと、それから、まあ、雲の処にあの一、鴟尾つてのを彫りますけど、まあ、その鴟尾の彫り方とかね。そう言う事だけは一応。あの一、手で作ることはほとんど自分で一生懸命勉強しました。

一方、手で作ることは深谷からあまり習わなかったと言い、逆に、深谷の作っているのを見て覚えたと言う²⁾。

まあ、当時深谷さんが全部手で作るものはやっていたいと思ったもので、うーん。ほんで、まあ、ほのやつを良く見とりましたもので、まあ、自己流で、こうやったらいいじゃないかって事で。

深谷定男は当時、別棟を使って仕事をしており、博基は深谷と並んで仕事をするとはなかったという。深谷はたまに博基が仕事をしていた棟に来て、博基の作る鬼に対して、「ここは良いじゃないか」とか「あそこは悪いじゃないか」と注意をしていたのが実態らしい。確かに、博基は「深谷から鬼を習った」と言っているが、博基と同じ棟で並んで仕事をしていたのは、父、勝義であった。ただ、勝義は窯の方を主体にし、そちらに追われることが多かったという。そうは言っても並んで仕事をする意義は大きく、勝義からの有形無形の影響は多分に受け継いでいるものと思われる。

博基は42歳の時に勝義から鬼源を任され、実質上、独立している。手造り専門の鬼板屋である。ただかつて、手回しの「輪違い」というプレス機械を導入して急増する需要に対応したことがあるという。またプレスの鬼瓦の白地を他の鬼板屋へ外注して、鬼瓦の需要の多い時は供給のバランスをとっている。鬼源の博基時代の特徴は手造り鬼の製造工程の合理化にある。博基は鬼源での鬼瓦生産を家内工業と見なし、その為の合理化への道として、プレス

ではなく、石膏型を多用している。家内工業と石膏型による合理化の関係を博基は次のように語る。

プレスじゃなくても石膏型で作ってやれば、嫁さんの手でも間に合いますね。まあ、ほとんど、どうしても手でできにゃいかんでも、石膏型さえあつときゃ、嫁さんが起こいてくれば、僕が仕上げるだけで。ほれで結構今までこう合わせて来ましたがね。矢張りある程度手造り部分も合理化していかと、立ち後れちゃうし。

石膏型の導入は勝義から関東大震災をきっかけに始まっている。しかも三河では一番最初である。つまり、鬼源は石膏型による手造り鬼の近代化及び量産化を伝統にして来ていると言ってよい。確かに他の手造り専門の鬼板屋でも、プレスは論外としても、石膏型は大なり小なり使用しているのが現状である。その石膏型の発祥の地が鬼源なのであった。

型もある程度、整備してありますし、よっぽど大きなものまで。そういう関係でだから早く出来ますわね。あれ一つずつ雲付けて模様付けてやとつたら、どれくらい手間掛かるんですわ。その模様の部分だけをほとんど大きなもんまで僕が型にしとりますので、それだから早く出来ますし、あの経済的にも良いですわね。矢張り早く出来た方が、仕事も乗って来るわね。早う出来てくれば。

早く出来るというのが石膏型のメリットである。もう一つのメリットが博基の言う同じ形のものの量産化である。

石膏型というのは親父じゃないけども、「千なら千で、ものすごい出来る」んだから。数が。もう「ピシッとしたの絶対作つとかなきゃだめだ」ってことで、きつく言われておりますのでね。ほとんど石膏もの一つ作るでも、本当、これが最高のものだなってものを、僕らでも型被せますよ。

博基は純粹の手造りものと比べながら、石膏型について言い直している。

もう、一品料理（100%手造り）はどこへ行ってもいいもんね。一つ作るもんだから。それ限りだから。石膏型というのは千個なら千個必ず出来てきますもんね。だから僕らも石膏型が一つ増える、型の原型というのは、ものすごく気を使って、でも最高の図でやりますよ。

博基はこのように石膏型による手造り鬼瓦の近代化に積極的である。石膏型の元祖、鬼源の特徴を次の博基の言葉が良く表している。

(石膏型は) まあ邪魔くさいだけになっちゃうけど、またとつくと不思議と飛び込んでくる場合があるもんだで、「ああ、型があって良かったな」と。ほんだで、先代から僕も三代石膏型貯めてありますもんね。

戦争中、皆、型が必要無いってことでふっちゃった方が相当あるですよ。ここは何一つふっちゃってなくて、全部残してあります。先先代のものでも紋から石膏型もね。まあ、手が揃ってる時はね、職人さんが手でやってくれたけど、家内工業になってね、奥さん使わにやいかんとなるとね、徹底的に合理化せにや駄目なんだわ。間に合わんわ、納期的に。型被せりや、納期に間に合っちゃうもんね。

昔と全く同じような手で作っとっちゃ駄目だね、やっぱり。僕はそう思うけど。まあ、その原型を作る腕がなきゃ駄目ですけど。

このように三代目博基は勝義から受け継いだ石膏型の技術³⁾を積極的に活用し、手造り鬼瓦の近代化を全面的に成し遂げ、手造りによって鬼瓦を量産する家内工業型システムを完成させている。博基は次のように言う。

僕も高校時代は最終的には家内工業になっちゃうって頭は常にもっとりましたで、もう、一年間、職人さん居るとき、デーッと全部型を被しとりました。おかげさんでやって来れたですけど。あれ、僕が一年間型被しとらんかったらできんかったでしょうね。もう型があったために矢張り家内工業でやって来たってことでしょうね。まあ、倅が入らん前は、おっかあと2人だけで、15、16年やっとりましたからね。一切人使わずに。

博基の作り上げた手造り鬼瓦の近代化は家内工業システムの確立にあり、石膏型の積極的活用を主軸にしている。その事は誰でも石膏型に粘土を入れ、型起こしすれば鬼瓦が成形できることを意味する。しかし、それだけでは荒い鬼の形をした土の塊に過ぎず、製品にはならない。型起こしは次に来る「磨き」によって手造り鬼瓦として完成される。つまり「型起こし」と「磨き」は表裏一体になっており、博基は当然のことながら、「磨き」の方には一方ならない工夫を凝らしている。何故なら「磨き」の良し悪しによって石膏型による鬼瓦の生命が文字通り左右されるからである。言い換えると「磨き」によって「鬼」に生命が吹き込まれると言ってもいいかもしれない。博基の「磨き」の工夫によって鬼源の家内工業生産式手

造り鬼瓦が完成したのである。「磨きとは何か」と博基に聞いてみた。

うーん。それはねー、矢っ張り見てもらわんとわからんと思います。磨きとはこういうもんだってことは。

「磨きとは矢っ張り体で覚えるしかないのですか」と聞くと、

はい、それしかございません。ほいだで、如何に早く綺麗に磨くかってことを、いつも僕は頭ん中に、常に。それだけです。

博基は基本的な姿勢についてまず述べると、次にその具体的な技術について話してくれた。

へらにもよりますわー。いやあ、へらがねえ、あんまり先っぽが尖つつちゃあかんしー、ある程度へらが硬うなぎゃあかんし。うん、あの一、道具の状態にもある程度よると思います。

僕は今までずっとこうやって来た、あれですけどねえ。あつ、ここだな、ここだなんて一つずつ分かってくるわけです。あつ、こうやったら早いなあ、こうやったらと良い面が取れるなつと、そう言う事が分かります。

うん、その度合を身につけにゃあいかなで。(笑い) あの一、やらんとわからんけどー。常にやっとするけどね。これ如何に早く、綺麗にやること、常に頭ん中、あの、入れとりますもんね。常に同じことやっと思ったら、あかんですよ。進歩がないで。常にこれどうやったら早く出来るか、どうやったら良い面が出来るか、やりながらでも頭ん中常に勘考してやらんと。

そうした中で、ある時、博基はあるへらに出会ったという。そして次のように言っている。

それが、あの一、調子が良かったですわ。「あつ、これだなあ」つと。今、まあ、全部それにへら直しちゃいましたけど。自分で削って。同じへらですけど、ちょっと直すだけですわ。あの、グラインダー削って。

博基は仕事にあるちょっとした改良点に気づいたのであった。そして直ぐに改良に取り掛かっている。

まあ、へら先だね。先を上手に調整せるってことだね。要するに。まあ、へらは何でも、
こうやって見ればへらですけどねえ。(笑い)

「ちょっとした角度の違いっていうことですか」と問うと、

そういう事です。角度とこのしなり具合ね。その差で、どれくらい大きいですわ。

ここまで来ると博基は当然のことながら「へら」それ自体にも凝っていることが分かる。「特別なへらを注文しているのですか」と尋ねると、

いや、今はへら作る方がありませんので。もう、売っているやつは良いへらほとんどございません。昔、三高^{さんたか}(三河高浜駅)の直ぐ駅の上ですけど、鍛冶徳さんというへら専門の鍛冶屋さんが在ったですわ。そこのへらをうちが昔、その鍛冶屋さんが品評会をやられた時に、ダーッてそのへら全部買い占めちゃったですわ。うちが。そのへらが全部残ったとるです。そのへらには錨のマークが入っとりますけど、刻印でもうすぐ分かります。

へらが変わると何が変わって来るのかを博基は端的に次のように言っている。

あつ、もう、全然、土、土の触りが違います。

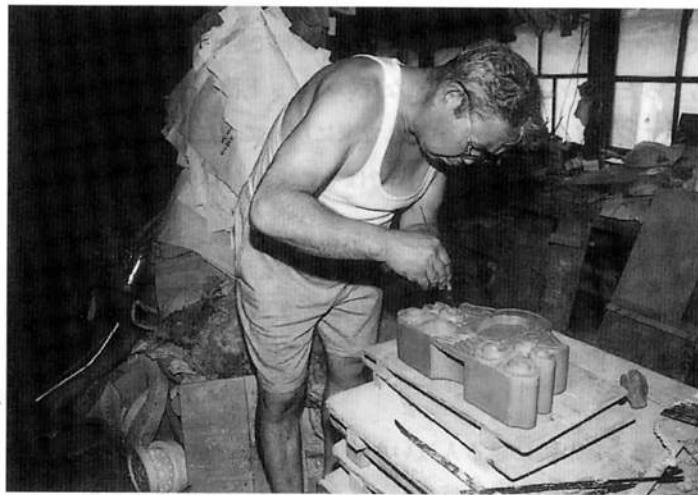
博基は未だにその錨印の鍛冶徳へらを使用しているという。その他にも良かったへらとして、あと二つ挙げた。鍛冶七さんという火造りをされるところのへら、そしてもと鬼源にいた職人さんの作るへらである。現在山本鬼瓦の職人をしているその人は鉄工所で働いていたことがあり、自分でへらを作るという。博基はへらに愛着があるようで、へらについて特別に言及している。

毎日使っておりますと、黒光りしてくるでねー、良いへらは。

「悪いへらはどうなりますか」と続けて聞くと、

悪いへらは錆びる方が早い。どっちみち良いへらで、早く仕事がやりたいもんだで。あの一、使いますので。錆びる方が多いですね、矢ッ張り。赤錆になって転がったものが多いです。矢ッ張り全ての世界は道具だと思えますよ。

勝義に始まる石膏型による鬼瓦の量産化は関東大震災直後からの急激な需要に対処するために導入された。鬼源では博基の代に石膏型による量産化で手造り鬼瓦の家内工業化を完成させている。石膏型はプレス型とは違い、各鬼板屋内で原型から作ることが出来る。それ故、原型の基となる図面と石膏型は丁度鬼源のように原則として門外不出となり、その鬼屋独自の鬼瓦を発展させることになる。その事がたとえ鬼瓦の量産化・合理化という考えに於いてはプレス型と基本的に同じであるにもかかわらず、手造り鬼瓦の独自性を各鬼板屋に与えているのである⁴⁾。一方、プレス型の場合、原型自体がプレス用金型を作成するために外注としてその鬼板屋から外へ出されるので、自然、その型が他の鬼板屋へ、さらには他県へと広がってしまい、型自体の鬼屋の独自性が消えてしまうのである。鬼源の場合、型起こしによる鬼瓦に手造り鬼としての妙味をさらに加味するため、「磨き」に独自の工夫を凝らして来ていると言えよう。(第5図及び第6図参照)



第5図
第三代鬼源 神谷博基
仕事場にて鬼瓦製作中



第6図
七寸中淵ビン付菊水影盛
足付若葉台付
神谷家本宅 神谷博基作

鬼源は現在、三代目博基と四代目岩根の2人で運営されている。職人は一切入って居らず、鬼源独自の家内工業体制を維持している。神谷岩根は昭和41年（1966）に生まれている。子供の頃のことを語ってもらった。

多少、粘土いじくった位で、しょっちゅう作るとか、もの作るとかはしてなくて、まあ、手伝いでちょこっとずつ手伝ったぐらいで。まだ、おばあさんが働いていたのは記憶にあります。プレスで「輪違い」という小さいものを抜いていた。その切り屑で遊んだっっちゅう記憶はありますね。

岩根は中学校を卒業して、父の博基と同じく定時制高校へ行っている。ただ直ぐに鬼源に入らずに、他の瓦屋へアルバイトに出ている。

最初、型のほう、粘土で型や、土を型へ込むっていうのが最初で始めて、まあ、そこから。途中で瓦屋さんへちょっとアルバイトでいろんな瓦のパレット積みや台車積みをちょこっとやって、3年ぐらいアルバイトで行って。それで家に戻ってきて、あと粘土でやりたり、それからそういうのをやって。まだその時点ではそこまでが自分の限界だった。

岩根は高校時代は瓦屋のアルバイトを中心にやって、卒業してから鬼源に入ったことになる。小さい頃は鬼源には2人職人が働いていたとのことだが、岩根が入った時には職人は誰もいなかったという。結果、岩根は父、博基について鬼瓦の修行をするのである。

習ったちゅうのは、もう、親父しか隣に居る人はいないんで。あと他に自分が入った時にはいなかったもんで。親父に聞いて色々反応もあって、なかなか教えてくれない。でも実際、目で見えて実際にやるようになった、真剣にやるようになったちゅうのは、この2、3年。お客さんに色々忙しくなって、それから一生懸命にいろんなものに挑戦してやれるようになってから、いろんなことに、やっぱやってみたいなというか、面白くなってきたっていうか。

岩根は7、8年くらい経ってから完璧ではないが、ほぼ何とかやれるようになってきたという。技術的なことに関しては、普通、部外者は如何に技術を高めていくかに関心が行くものである。ところが、現場の論理が一方にあることに岩根から気づかされた。現場では顧客と単面的な現実と直面して、独特のやりとりがあるのである。

もう見て、親父のを見たり、聞く。親父に聞いたりして、習得してあと見て、自分の作っ

たのを。それ位しかないですね。

まあ、自分の作ったものをまだ親は納得しととは思いませんけど、だけど今の段階では自分の考え的に行けば、単価が安いから、如何に良くて手を抜いて、ある程度の物を作るか。単価が高ければ、時間をかけて作っても良いんですけど、単価的に安いんですからこの業界なんかが。だから、「その辺である程度、手を抜けるとこで抜け」というようなことは矢張りお客さんに言われます。

通常、「手を抜く」ことをお客さんから要求されることは考えにくいと思う。単なる値引き交渉はあり得るであろうが。しかし、鬼瓦の他の製品にない特殊な性質が、一般には考えられない「手抜き」有りの値引き交渉を発生させるのである。岩根の言葉にその辺りの事情が表現されている。

結局、屋根上がつっちゃって見えないところに手をかけてもしょうがないから、だからよく見えるところは綺麗にやっといてくれと。

岩根は一言これに付け加える。「もう値段の価格破壊でしょうね。」この鬼瓦の特殊な性質を過激に押し進めていった極致が平板瓦及びその道具物ということになろう。ここまで来ると(株)伊藤鬼瓦の伊藤善朗が言及しているように、価格破壊のために本来の瓦の機能さえも軽視または無視されて、いわば屋根の上の無法地帯といった状況が現代の日本の屋根に起きていると言えよう。岩根はかなり現在の日本の状況に悲観的である。

もう多分一般住宅的にはもう少ないような気がしますんで。もう、堂宮、神社仏閣、そういうこの鬼が最終的には日本文化で残って行くんじゃないかと。もうこれなしでは多分いかんじゃないかという気がしますけど。実際まあ一般の家の鬼なんかほとんど使われていないから。またこれがどういう風に年数が経って変わって来るのか分かりませんが、まあ、瓦が見直されれば使われますし、まあ、このまま屋根が軽いで長持ちすれば、もうそんな鬼なんか要りませんと。

実際に今の若い子が「鬼瓦」って言っても分かりませんので。はい。そういう、もう、まあ実際、名古屋とか行っても豊田行っても、「鬼瓦つくっとる」って言っても、「何、何だ」っちゃう感じになりますもんね。聞いても分からないと。だから鬼瓦っちゃうと瓦屋さんってイメージがあって。



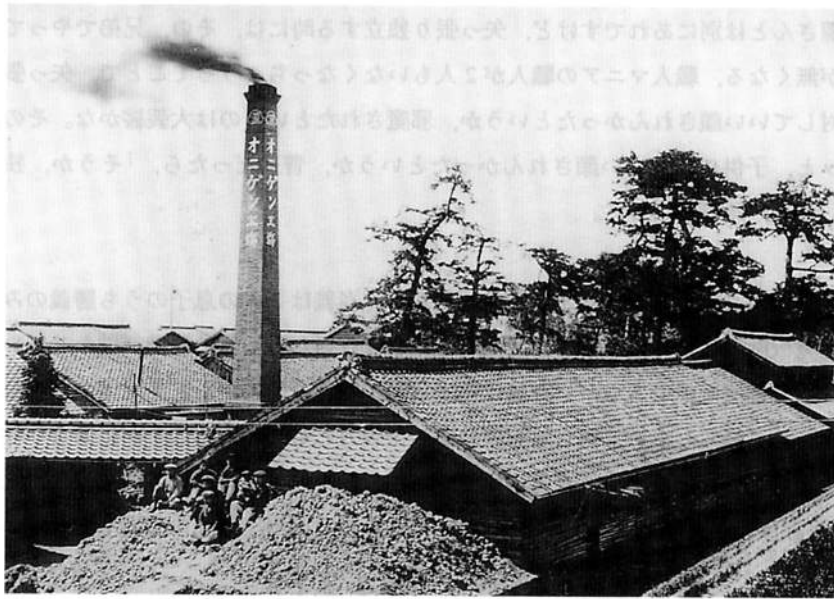
第7図
 第三代鬼源 神谷博基（左）
 金焼付恵比須
 第四代鬼源 神谷岩根（右）
 傘立

需要あつての鬼瓦屋である。それ故に、岩根は鬼瓦だけでなく、インテリア関係の物を実際に作っている。花器とか、置物、傘立、陶柱（電気スタンドの類）などである。インタビューは1999年の夏、つまり4年前に行っている。今回（2003年）訪れた際には岩根は電気轆轤を使って、または手びねりで、花器だとか、植木鉢だとかを作っていた。ここまで来ると通常の焼き物と重なり合ってくる。鬼源が戦争中、茶碗工場に变身したのとそれほど差はない。つまり、それほどまでに「鬼瓦の世界」と「焼き物の世界」とは基本的なところが同根同種の文化なのである。そして、この「三河粘土文化圏」が太古より存在したが故に、三河の地に仏教の伝播と共に鬼師の世界が誕生したわけである。（第7図参照）

岩根のような動きは例外ではなく、他の鬼板屋でも特に若い世代の間に広がっている。また、過去、古い世代においても例えば第二次世界大戦中及び戦後しばらくの間、鬼瓦の仕事から離れるという今の時代と同様な動きが起こったことは事実である。今活躍中の本格派の鬼板師にとって、若い世代がインテリア関係などの鬼板以外へ向かうことは、本業を踏み外していることになる。しかし、鬼瓦は粘土文化の一つであることを考えるとき、元々粘土それ自体が本質的に持っている可塑的な動きなのだとも言える。粘土から鬼瓦しか作れないわけではないのである。一種の先祖返りのような動きと言ってもいいかもしれない。

(有)上鬼栄

神谷春義の弟、神谷栄吉（三男）が鬼源から独立して興した鬼板屋が上鬼栄である。本来なら屋号は「鬼栄」となるはずであったが、栄吉が鬼屋を始める時すでに同じ高浜に「鬼栄」という鬼板屋があったのである。それで、栄吉の興す鬼屋が「鬼栄」に対して町の行政区分から上の地区に当たるので、「上鬼栄」としたという。ところが二代目の知佳次は上鬼栄から



第8図

当時の鬼源工場の全景 土置き場に集まった職人たち

(現在、この煙突はないが、^{いんか} 聲の波が古き良き高浜の町並を伝える)

「上鬼栄瓦工業」へと社名変更しており、さらに三代目英廣は再度変更して現在「(有)上鬼栄」となっている。

初代神谷栄吉は明治21年(1888)に生まれ、昭和47年(1972)に84歳で亡くなっている。80歳を過ぎても仕事場でごそごと何かを作っていたという。英廣がその様子を語っている。

うちのお爺さん(栄吉)は、祖父は、あの、84歳で亡くなったんですけど、あの、70後半、80近くまで、まあ後半はちょっと、あの、杖をついて、職場に入って小さな紋とか、そういうものをずっとやってましたけど。

栄吉がいつ頃、兄、春義の鬼源へ入ったかは定かではない。ただ春義とは年齢差が10歳あり、同じ兄弟とはいえ、実質上、また、少なくとも仕事場では親方と職人の関係であったと思われる。当時の状況は残念ながら分からなかった。鬼源工場で撮られた工場の全景写真に辛うじて写っている仕事場での様子が僅かにその頃の様子を伝えるのみである。(第8図参照)ところが栄吉のみでなく、四男に当たる長之助も親方春義のもとで職人として働いていた。兄弟が鬼源として働いている間は順調にいらっていたと思われる。しかし、栄吉と長之助の2人がそれぞれ独立するということが起きる⁵⁾。鬼源は2人の有能な職人を失い、実質的にもまた精神的にもショックが大きかったらしい。英廣が次のように言っている。

鬼源さんとは別にあれですけど、矢っ張り独立する時には、その、兄弟でやってた、人手が無くなる、職人マニアの職人が2人もいなくなっちゃうってことで、矢っ張り独立に対していい顔されんかったというか、邪魔されたというのは大袈裟かな。その話をチラッと、子供の頃。いい顔されんかったというか、普通だったら、「そうか、独立するか。じゃ、頑張れ」って。

この事が春義の心にわだかまりとして残っており、春義は3人の息子のうち勝義のみを跡継ぎとして鬼板師にさせ、他の息子は同業者を作らせないために他の職業へ就かせている。ここからは私の推測なのであるが、春義は親方意識が強く、職人がたとえ兄弟であれ息子であれ、職人として見てしまい、同じ対等の独立した親方として考えることが出来ない性分の人だったのかもしれない。事実、春義の鬼源から独立していったのは兄弟の栄吉と長之助のみであり、鬼源は徐々に職人をあまり置かない、博基のいう家内工業型の鬼屋へと変化していつている。

このように栄吉は鬼源から独立するが、直ぐに鬼板屋として上鬼栄を興したわけではなく、諸般の事情でまず瓦屋になった。つまり鬼源と競合しないということなのであろう。ところが徐々に変わっていき、結果、上鬼栄となる。第二代上鬼栄の知佳次がその辺りのことを語っている。

元々、瓦屋だったもんだな。鬼瓦屋、鬼板屋やる前にね。瓦屋やっとならしたもんだでね、こちらの親父が。瓦屋やっとなら、瓦屋やったが、それが鬼板屋に変わったっていう話だ。その頃は親父、この在所の親父（栄吉）は、あの、あれだで、鬼板の白地を作ったでね。白地屋のようなことを始めはやりよったようなことで。

知佳次は栄吉の実の息子ではなく養子で上鬼栄に入ってきているので、なおさら昔のことが不鮮明になってしまうのである。しかし、知佳次はただの養子ではなく、初代鬼長、長之助の息子であり、従姉妹に当たる栄吉の娘（花身）の所へ養子に來ている。それ故、実に興味深いことを知佳次は言っている。知佳次の実の父である長之助と叔父に当たる栄吉の鬼板師としての腕を比べているのである。

あの、腕はね、腕は矢っ張り、鬼、鬼板そのものちゅうだか。ではねえ、あの一、こっちの親父（栄吉）のがあれだったねえ。几帳面な、綺麗な仕事、あの、さられよったですね。

あれは（長之助）、ちょっと、大きい物を作るのが得意だったもんだでね。大型のものを

ね。ほいだで、作るものによってと言っちゃあ何だけども、あの一、ほやーこっちの、きっと、先輩、先輩だわな、こっちの（栄吉）が3つか4つ上だもんだ。（笑い）

知佳次の長男で三代目上鬼栄に当たる英廣は、晩年の栄吉を直接知っているが、若い頃の栄吉のことは言い伝えになっている。

これは私の亡くなったお袋（花身）に聞いたんですけど、終戦の、終戦後の、矢っ張りそれこそうちが日本全国、うちが戦災で焼けちゃって。復興の、あの、瓦がない、焼いてくれ、まあ、瓦に付属した鬼ですけど、製品作るのにも燃料がないから薪と言いますかね、燃料持ってきたら製品出してあげるといような、そんな時代ですから。あの、こんなこと言っちゃいかんだけど、余所の鬼屋さんなんか、鬼作ってもストックしてためときゃ、値段が上がる、上がる。あの、上がるが、その、直ぐ売らんでもいい。うちの祖父は高値で売るといことはしない。来たら注文通り、一生懸命作って、あの、それで、それこそ、足元を見る、お客さんの足元を見るような、そういう売り方はしなかったというか。何かちょっと違うかもしれませんが、偉かったなあ。

英廣の話から現役時代の栄吉の生き様、信条が良く分かるのである。

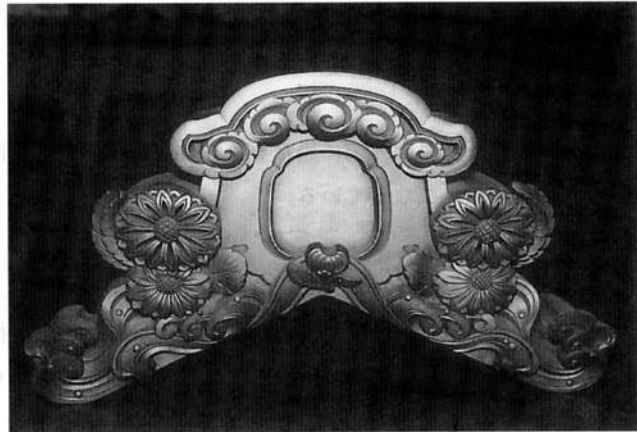
言ってみりゃ、ちょっと馬鹿ですけどね。みすみす高く売れる、取っとけば高く売れるかもしれませんが、矢っ張り、あの、そういう事をしなかった。そして、あの、あれです、ね、確かに偉かったな、今の職人さんもそうだけど、黙々と鬼を作る中で、偉かったなと思うんですけど。

英廣は他にも栄吉に関する話を語ってくれた。栄吉独自のやり方かどうかは分からないが、鬼板師の修行の一環を知ることが出来るエピソードである。

屋根に載せるそういう飾りものの中には、動物、猫とか虎とか何か、いろんな注文が来た時なんかねえ。これも、私は知らなかったんですけども、ある夜、その職人さんが教えてくれたんですけど、「あんたんとこの爺さんは、そういう物作った時に、あの、余所のじゃない、動物園へスケッチブックを持って、こうスケッチしに行った。」まあ、今、今はまあ本なんか沢山出てるし。昔はそういう物、作ろうと思って研究しようと思って、動物園へスケッチブックを持って行ったりして作ったんだなあ。あの、それから、何だったかなあ、何か鬼を余所に見に行ったのかな。何だったかな、上手く思い出せないんですけど。私は知らなかったけど、余所の鬼屋さんで働いている職人さんが、「あな



第9図
初代上鬼栄 神谷栄吉



第10図 ビン付菊水足付 神谷栄吉作

たのお爺さんはね、何かでスケッチして泥棒と間違えられて……」

このように栄吉は営業はどちらかといえば真っ正直で、頑固な職人気質で、黙々と鬼を作る人だったようである。(第9図及び第10図参照)

第二代上鬼栄になったのは、神谷知佳次であった。知佳次は大正12年(1923)生まれで、現在(2003年9月)80歳になり、今も現役で鬼板師として仕事をしている。知佳次には1999年の夏に一度インタビューをしている。しかし、インタビューをした場所が上鬼栄の二階にある事務所で、その時、直接話を聞くには一切問題なかった。ところが場所柄人の出入りや、電話などの対応が忙しく、改めてテープを聴こうとした時、知佳次自身の言葉が他の人達の声に消されて聞き取れなくなっていたのである。それ故、再度、2003年7月に無理を言ってインタビューに応じてもらった次第である。ただ4年前と比べて知佳次は年を取られており、こちらが期待したほどは詳しい話を聞くことは出来なかった。

栄吉のところで少し書いた話だが、こういったインタビューの状況に加えて、知佳次は養子であり、なおさら昔の上鬼栄について把握するのが難しかった。さて、知佳次は浅井長之助の次男として生まれている。長之助は栄吉の弟であり、しかも鬼源で親方でもあり、同時に兄でもある春義の元で鬼板師になっている。言い換えると、栄吉と長之助は直接の兄弟であり、同じ鬼屋、鬼源での兄弟弟子なのである。知佳次は鬼板屋、鬼長の息子として生まれ育っている。当時、鬼長には小僧を入れて7、8人ぐらい職人さんがいたと言い、上鬼栄よりも職人の数が多かったらしい。小さい頃から職人さんたちの間に入って遊んでいたという。

もう機械がないもんでね。昔はねえ。もう手造りが、半分以上、手造りというようなことをしとったもんだんね。石膏、石膏型で作るようになっちゃったもんだんね。

知佳次は尋常小学校を卒業すると、常滑工業学校窯業科に入り、5年間そこで学んでいる。18歳で卒業したという。知佳次によると、窯業学校へ行く前も行っている時も一切、鬼長で仕事の手伝いはしたことがないと言う。他の多くの鬼板屋での話とは違うので、念を押して聞いたのだが、返事は「無いねえ、うん」であった。おそらく、知佳次も言っている通り、鬼長には当時、手造りに携わる多くの小僧や職人がおり、長之助自身、息子の手を強いて必要としなかったのではないかと考えられる。事実、元祖の鬼源は栄吉と長之助を例外として一子相伝のような形態になって来ているのに対し、長之助の元からは何人も職人が独立し、少なくとも4軒の白地屋が現在もなお営業しているのである。長之助は兄春義の考えに反発し、逆の方針、すなわち職人の独立を積極的に認めるやり方を探っていたと言えよう。

知佳次は常滑窯業学校を卒業して昭和16年(1941)に鬼長へ入らずに、名古屋市役所の職員になり、工業指導所に配属されている。知佳次は次男であり長男の道夫がすでに跡取りとして鬼長に入っていたので、鬼板師になることは当時は考えていなかったと思われる。その上、その頃はすでに戦時中であつた。知佳次は昭和18年(1943)に召集を受け、兵隊にとられている。

志願で行ったとかそういう事じゃないですね。普通の年齢で。徴兵検査ん時から。そいで、あれだな、あの、南支(南支那)行って来ました。

そして、昭和20年(1945)に無事、高浜へ帰って来ている。暫く鬼長に入っていたようである。兄の道夫がやはり召集され、さらに戦後、外地で抑留され鬼長に居なかったからである。多分、この道夫の動向がはっきりしない間は、知佳次は鬼長の跡取りの第一候補と見なされていたと思う。しかし、道夫が運良く帰国できたことにより、知佳次は鬼長から上鬼栄へ間もなく養子に出されるのである。知佳次が24歳の時の出来事であつた。すでに書いたことではあるが、上鬼栄の親方、栄吉は、鬼長の親方、長之助と実の兄弟である。結果、知佳次と配偶者になった花身は従兄弟同士である。それ故、上鬼栄と鬼長は他の鬼板屋と比べて血縁上とりわけ関係が深い。二重に血が交わっていることになる。

知佳次は上鬼栄へ養子として入ることになり、それは同時に鬼板師になることを意味していた。上鬼栄に入ってからのことを知佳次は話してくれた。

ほとんどねえ、あの一、ほとんど、ま、石膏型でね、型起こしで。あの、出来る者は特殊なもんが来ると、手造りになりますけどがね。あの、普通の注文はね、皆、あの一、

もうすでに尺型で型がありますもんだで、型起こしすりゃ。そいから、それも勿論仕上げなかんけどねえ。ま、そういう順序で行くわけだけど。ほいだで、あれですよ、特殊なもん以外は型起こしで、そういう仕事ですね。

職人が3人か4人いて、栄吉も一緒になって、同じ仕事場で働きながら主に見て覚えて行ったという。

よっぼどのまで、もう型でやっちゃうもんだでね。石膏で。ものすご有るもんだでね、色々な種類がね。そいで、やってたわけだけど、それで特殊なもんがちょいちょい来るもんだ、そういうのは親父さんだわな。親父さんに、あの、見てもらったりね。ま、自分でやれんところはね。学校から大体が、焼き物の学校だったもんだでね。

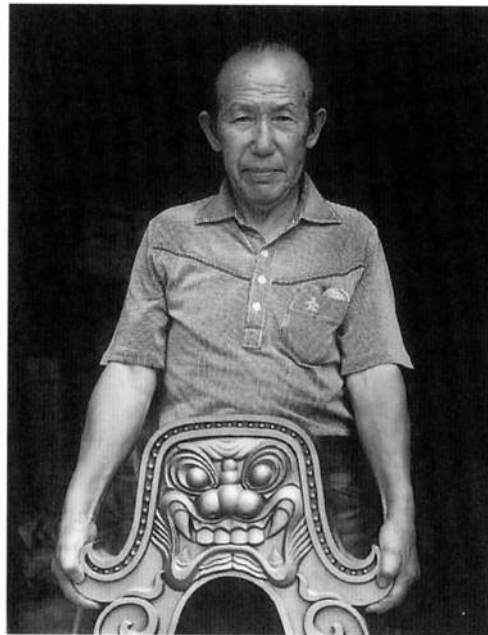
知佳次の言っているように、常滑の窯業学校へ5年間若い頃行っているんで、全くの素人が鬼板屋へいきなり入ったのとは条件が違っている。その上、知佳次は鬼長の息子として鬼板屋で成長しているのである。それ故、石膏型から普通の鬼を起こすのはそれほど問題は無かったようである。ただ全くの手造りの注文が来た時には、初めての頃は親方に当たる栄吉や古い職人が作っていたという。窯業学校で経験しなかった手造りの作業が難しかったという。

そうですね。図面でね、図面見て原型を作るってのがね。それが一番あれでした。結構初めてでした。

あの、常滑の窯業学校だったけど、あっこ5年出とるもんだん。ほんだで、土には慣れとるもんだん。土仕事に慣れとるもんで何でしたけどねえ。

一年ぐらいたちゃあ、ええ、よっぼどの物まであれですねえ。あまり大きいもんはやりませんけんねえ。うち、割に大きい仕事が多かったですねえ。あの、お寺の仕事ねえ。お寺とか、神さんとか、あと堂宮のようなね、仕事が多かったですねえ。そうすると、古い職人さんの、3人くらい居らしたかなあ。ほいだで、ここをわしが跡を継いだについては、そういう人方が皆、あの、大きなやつをやってくれるもんだ。暫くは、あれだな、小さなやれるもんからということでしたけど。

知佳次は窯業学校を出ていたんで、土仕事には直ぐに慣れていった模様である。窯業学校を出ていたもう一つの利点が石膏型本体を新しく作ることだったという。しかも上鬼栄は知佳次が入った頃は石膏型が鬼長に比べてかなり少なかったらしく、知佳次は原型を栄吉や職人



第11図
第二代上鬼栄
神谷知佳次（76歳）

に作ってもらい、石膏型を次々と作っている。

割にね、型（石膏型）が少なかったんですよ、こちらは。わしの在所（鬼長）の、在所の親父（長之助）はだいぶ型が多かったけんね、比べると。はい。ほいで、わしが来てから、相当、型、相当ってってあの、わしも負けん位の型作ってね。うん、型で。まあ、そうすると職人さん少なくなつて、あの、あれだもんね、型で作るようになりゃね。

型の原型も初めはそりゃ親父さん方、皆に任してね。うん、図面から。癖もあるしね。ほいで、あの、親父さん方がやれる限りはねえ、やってくれよる。

知佳次が上鬼栄へ入ってから、それまでどちらかと言えば、伝統的な手造り中心の鬼板屋であった上鬼栄に石膏型による量産体制の近代化が成されたのである。丁度、鬼源で、二代目の勝義が瀬戸の窯業学校を出て同様の技術を初めて高浜にもたらしたようにである。知佳次は常滑の窯業学校の経験を元に、さらに石膏型の利用の仕方を鬼長で見ており、上鬼栄において自ら実行したのである。（第11図参照）

80歳になる知佳次はまだ元気に仕事をしているが（第12図参照）、上鬼栄は実質上、三代目英廣に移っている。英廣は昭和23年（1948）に生まれている。英廣は知佳次が養子として鬼長から上鬼栄へ入って来たことにより、栄吉と長之助の2人の鬼板師を祖父に持つ特殊な



第12図
河豚巴蓋
神谷知佳次作

環境の元に生まれている。血統的には三州の中では鬼板師のエリートと言って過言ではない。それを物語っているのが英廣の次の言葉である。

大体こういう家に生まれたということで、その長男ということで、まあ、いろいろ、あの、選択の余地は無いというか。まあ、次男三男だったら、他にやりたいこと無いわけではなかったんですが、まあ、あの、事実上、継いで行かなきゃいけないということで。

英廣は小さい頃の思い出を語ってくれた。土窯時代の話になるが現在の清潔な感じのするガス窯時代とは違う独特な土臭さや人間臭さ、汗臭さがある。

今のようなそういうガスで焼いた、調整する、煉瓦と金属、金属で、今の新しい近代的な窯。昔の窯は、そういう泥、泥といいますが、土窯、あの、達磨窯と言いますがけれども。そういう達磨窯は今、石炭、重油、それから、あの、まだ他にもね、燃料は使いますが、木炭とかそういう物で炊きあげていったんですけども。

一窯積んで、それを焼成してそれで、あの、窯から出すというのを、本当に夏ですと、一窯そういう事をやりますと、ほんと体力を、消耗が激しいといいますが、本当に大変なことだったんです、昔は。今は大分良くなりましたけど、親がその様な、あの、親が窯をやっているところを見て育ったわけですから、そういう苦労というのは、私が、今の子供の、息子に見せる以上に親の苦労を目の当たりにしているわけですけど。

ですから当然、ほんと小さい頃は、親がその、窯で積んでたら、あの、製品を積んで、窯詰めをね。まあ、邪魔だったと思うんですけど、そういう物を、あの、窯を積む道具、

遊んだり、それから、(窯の)ドアを仕切る、遮断するのに砂、砂とか何かを使います。砂が置いてあるとこで遊んでたりとか、そういう思い出が矢張り有るんですけど。それから窯^{あい}の間には親とか職人さんが作ってる職場の、あの、邪魔をしたと思うんですけども。そういう粘土でとか、鬼を作った切れっ端とかそういう物で。

あの、部屋を借りて、使って見える部屋を借りて切り刻んだりとか。そういう事で、土に親しんで、そして、窯、窯のそういうあの熱気を埃の中で育って来たわけですけど。

英廣は高校を卒業すると同時に上鬼栄へ入っている。ところが英廣のような血統書付きの人間が、驚いたことに鬼板師になるための修行に行かずに、営業や販売に携わっているのがあった。やはり、知佳次の代に主に石膏型による量産体制が確立し、上鬼栄の生産部門が職人を中心にすでに充実しており、次期社長であった英廣は職人ではなく将来の社長業を見据えた仕事に従事させられたのであろう。

高校を卒業と同時にうちの家業を矢張り、あの、入るは入ったで、何でもそのまだ鬼を作るとかそういう事出来ませんので、下働きというか、配達とか、そういう、製品の窯に、窯から出したり入れたり。そして、その製品を、あの、煤が付くとか、それから、そういうちょっと少々傷が付くとか、そそくったりとか、そういう窯黒^{かまぐろ}と言いますが、そういった仕事とか。あの、ほんとの職人さん、鬼の職人さんは職場で鬼を作っていればいいですけど、他の仕事もまあ必要欠くべからざる仕事も沢山ありましたので、そういう事を主に、あの、卒業と同時に携わって行って、まあ、色々やってたわけですけど。そういう職人さんがやる以外のことをやっていたわけです。

上鬼栄の場合、英廣が入った頃はすでに生産部門と販売部門が分離独立して、いわゆる家内工業的段階から会社組織に脱皮した形の鬼板屋になっていたと言えよう。その事を象徴している変化が屋号に現れている。栄吉の時は「上鬼栄」であった。知佳次の代になると「上鬼栄瓦工業」に社名変更している。この変化に知佳次が目指していた意図が見える。英廣はそうした近代化した上鬼栄の中に入ったのである。英廣は次のように述べている。

私は、その後、窯の製品、製品の積み込み、窯出し、配達、その他色んな事があって。あの、結局、実際作る製作現場の、職場の方であれば、なかなか携わることが出来なくて、小さな家紋とか、あの、ちょっとした物を作るぐらいで、本格的に鬼を作る技術というものをなかなか覚えることが出来なかったんですけども。

あの、見よう見真似で、その門前の小僧習わぬ経を読むじゃないですけど、まあ、鬼の作り方っていうのは、大体、当然の事ながら、あの、大きい鬼とか、形の大きい鬼はどうやって図面から組み立てて作っていくかって事も分かってます。それから型のある物はどのように型に粘土とこう付けていって成形していくかっていうことも、まあ、分かっておりますけども。私自身、まあ、その、いわゆる職人さんという事で職場、職場で、その製品、製品の製造には、あの、従事して来なかったということで。

上鬼栄は英廣の代になると販売・営業と言った仕事と職人の仕事がほとんど分離してしまい、結果、英廣は全体を統括する社長業をすることになったと言えよう。上鬼栄の現在であるが、製造に関しては手造りの鬼瓦100%で、鬼瓦のプレスはしていない。例外として「桃留め蓋」と「干支」はプレスをする。そして取引先の注文に応じてプレスの白地を他の鬼瓦屋へ外注するのである。結果、プレスの鬼瓦と手造りの鬼瓦の割合はおおよそ4対6になっている。上鬼栄は二代目知佳次の時に約5年間ほどプレスを一種類だけ生産したことがある。その時、共同生産方式をとり、上鬼栄、鬼長、鬼明の三社で一種類ずつプレスを生産し、需要に応じて相互に融通し合っていたという。1970年代の頃で、当時、住宅ブームで鬼瓦の需要が増大していたのがプレスを始めた理由である。ただ、上鬼栄は暫くして、プレス生産を中止し、プレスの外注に切り替えた。この時に上鬼栄は手造り鬼瓦に特化することに決めたのである。現在の上鬼栄における職人及び従業員の人数がこの事を良く表している。製造部門に5名職人が働いている。その内訳は手造り鬼瓦なら何でも出来るベテランの職人が2人、石膏型さえ有れば出来る職人が3人（その内、若い衆が2人）、窯専門の職人が1人（石膏型から起こせる）、そして女性の従業員が1人（午前中事務、午後、職人：大きな鬼、難しい鬼以外は出来る）といった陣容である。若手とベテランとのバランスが良く、互いに助け合いながら働いている。英廣は職人の育成という事を第一に念頭に置いて日夜努力している。

矢っ張り、ベテランの職人さんの隣に若い、若い人を付けて、あの、それとなく大きいところを、あの、まあ、それにはもう一つ理由が有んですけど。さっき言った大きい物をズルとか、そういう時に若い者がそこにおれば「ちょっとズツてくれ」って言われた時には。それから大きい物をやってとか、矢っ張り見るとはなしに横に居れば、何となく作り方見てますよね。

そういう事で、あの、それと、月、月一回位と思っているんですけど、なかなかその月一回は実現しないんですけど、ミーティングといいますか、お客さんから言われた事を、「あそこ、こういう風に作ってもらわなきゃ」とか、そういう事を月一回ミーティングで、あの、やっているんですけど。



第13図
第三代上鬼栄 神谷英廣

このように職人が若手、ベテランを交えて充実しているところへ、知佳次がまだ現役として働いており、英廣が親方として全体を把握し営業すると言った体制になっている。上鬼栄にとっての朗報は英廣の長男、慎介（21歳）が今年から家業を継ぐために入ったことである。名古屋芸術大学彫刻科を中退している。鬼板師としての血が流れているのは明白である。上鬼栄は厳しい不況の中、営業努力をしながら将来への準備を確実に進めている。（第13図参照）

サマヨシ製鬼所

フィールドワークを主体にした調査、研究をしている時、奇なる出来事に時折出会う。サマヨシ製鬼所の件もその中の一つである。平成11年（1999）8月5日に仕事場の隣にある本宅で、インタビューをして帰った。次に訪れたのは平成15年7月5日である。その間は仕事の合間を見ては他の鬼板屋を一件ずつ回っていた。三州鬼瓦の全体像を自分なりに掴む作業をしていたのである。その間、噂にはサマヨシ製鬼所のことについていくらか耳にしていた。ただ、当事者ではないので直ぐには動かなかった。今回直接、杉浦伸本人から平成11年9月6日に会社が倒産し、同じ月に鬼瓦組合に辞表を提出し脱退した旨を聞かされ、改めて驚いた次第である。インタビューをして一月後の出来事である。後に出て来る鬼仙の連帯保証人になっていたのが原因で、鬼仙が自己破産したのを受け、サマヨシ製鬼所も連続倒産したのである。

それ故、現在サマヨシ製鬼所は存在せず、杉浦伸は夫婦で鬼瓦を臨時にアルバイトのような形で作っている。このように倒産しても作業を続けられる理由はサマヨシ製鬼所と杉浦伸の2人の弟が運営している笹山製鬼所が兄弟会社になっており、笹山製鬼所がこの出来事か

ら法的に無傷であったことが大きい。ただ笹山製鬼所は白地組合所属になっているので、ここではサマヨシ製鬼所についてのみ記述する。

サマヨシ製鬼所は杉浦伸の父、杉浦佐馬義に始まる。佐馬義は大正2年生まれで、その頃佐馬義の父、由太郎^{よしたろう}は土器屋をしていたという。佐馬義は土（器）の世界に生まれ育ったことになる。その生まれ育った環境を取り囲む大きな意味での環境としての町を、特に仕事に関連して佐馬義は語っている。

この地区では大工になるとか、あるいは左官になるとか、屋根屋になるとか、まず建築の方、住の方を重点に置くのが割合に手っ取り早かったんですよね。で、その次には、あの、鍛冶屋になるとかねえ。あの当時は大きい重工業じゃなかったのね。町工場で、あの、荷造りの鉄鋼仕事。田舎では窯鍛冶屋といって、あの、窯やそういったのを作ったり、鑄がけたり、そういう、仕事をね……だったんだけど、特にこの三河村の高浜地区では土器、土管、そういったの、まあ、あの、瓦ですよ。

瓦には当然、役瓦があり鬼瓦があるもんでね。まずは鬼瓦が良からうという事で、あの、私たちが小学校卒業する頃には大抵鬼瓦屋の小僧になるのが……当時まだまだ鬼瓦があの、まあ、その時代としては比較的要求されておっただけだったんでね。それで、まあ、我も我もってことで。あの、まあ、これは4年間ぐらい修行せんと一人前の職人になれなかったもんでね。まあ、4年間奉公することで、皆さんがここへ来て鬼瓦屋に。中には大工になった人もおる、左官になった人もある、で鍛冶屋になった人もありますよ。

このように三河村高浜地区にはこの地方独特の環境として鬼瓦が仕事として存在していたことが分かる。佐馬義は高等小学校を卒業すると、直ぐに鬼板屋へ小僧として入り、仕事に就くのである。この時行った先が、上鬼栄であった。計算すると、昭和2、3年の頃と思われる。大正末期頃、鬼源から独立して間もない神谷栄吉の上鬼栄へ佐馬義は来たことになる。順調に行けば佐馬義は上鬼栄で鬼板師の職人になったと思われる。ところが家庭の諸事情で続けることが出来ずに、1年半ほどで小僧を辞めている。

私の場合には特に、あの、4年間の修行を続けることもできんで……我が家があまりにも貧しくて、それで親父は弱くてね。父親が弱くて、世の中、不景気で。それが為に、ええ、それに姉たちは嫁いで、2人の姉は早くして死んでしまっ、もう、私が一人で働かんと、その日の、あの、米買い銭にも困るというような、ね、そういう状態だったからね。

子供心にも、もうこりゃ、あの、小僧して修行していることはできんで、暇もらって、たとえ1日米が一升でも二升でも買える金を儲けんことにはという事で。まあ、反則ですけど、^{わん}年を破ってね。但し、その間にね、小僧というのは、あの、向こうでご飯を食べさせてもらって、体の太うなる盛りに飯を食わせてもらって4年間を修行するわけだけれども、私の場合は一年間は食べさせてもらって、あと一年間も、あと半年もかね、半年まあちょっと行ったかね。まあ、8ヶ月ぐらいは。あの、うちから、修行する鬼板屋が直ぐ近くだったからね。ご飯を食べてそこへ働きに行ってたんだけど。そういう事もあって、本当なら、あの、うちの内容を話して、親方の方にも納得してもらって、そして辞めるべきだけれども、そういう事なしで辞めてしまっ……

以上のようにサマヨシ製鬼所は初代の佐馬義が小僧であった僅かな期間でもって、直接には上鬼栄と、大きくは鬼源・鬼仙系と辛うじて繋がっていることが分かる。佐馬義自身は上鬼栄を出ると、^{かみひこ}榊彦という洋瓦の瓦屋へ移り、そこで特殊瓦を主に作るようになった。

当時、同じ瓦屋でもフランス型と言ってね、この日本型の型とは違ってフランスの方でよく使われておった、あの、洋瓦、洋瓦と特にそういわれておった鬼瓦の方へ行って、そこでは今まで作っとった瓦とちょっとデザインが違うんですよね、鬼瓦のデザインがね。日本型はデザインが違うんだけど、洋型の方は、立った立方体的な物でね。そういう鬼瓦が多くてね。それを作る、その、細工が大まかで、簡単に作り良いんですわ。僅か1年やそこの修行で結構それが出来てね。その方へ私の場合は変わってしまっ。従って本当の昔からの伝統の鬼瓦に対する腕は私にはございませんのでね。

鬼瓦の世界から事実上離れた佐馬義ではあるが、洋瓦の世界の特殊瓦へと仕事を移している。ところが昭和17年頃に兵隊として召集され、満州へ送られている。終戦前にシベリヤへ抑留され実際に日本へ帰って来たのは昭和22年頃である。その後色々な仕事をしたが、結局、戦前と同じ榊彦で特殊瓦を作ることになった。転機は昭和34年(1959)に来た伊勢湾台風であった。これを機に佐馬義は独立し、自ら瓦の道具物を生産し始める。この時点ではまだ洋瓦の世界であるが、たまたま家の直ぐ近くに、鬼瓦の機械化を本格的に進めていた、高浜で第1号といわれる深谷定男がいた。彼の仕事をりを目の当たりにした佐馬義は洋瓦から和瓦の特殊瓦である、鬼瓦の機械生産へと再転身を図ったのである。昭和38年の春であった。(第14図参照)

サマヨシ製鬼所の二代目が杉浦伸である。昭和23年(1948)の終戦記念日(8月15日)に生まれている。小さい頃のことを振り返って杉浦伸が次のように語っている。



第14図
初代サマヨシ製鬼所
杉浦佐馬義 (86歳)

何せ、貧乏な、ねえ、あの、そういう風に言われたから。そんな、あの、何ですか、あの、高級な、何も知らず、ただ学校、小学校は大人しくすんなりと、小、中学校を出て、別に兄弟、4人兄弟の内まあ、何ですか、総領の甚六て言うか、呑気に育ったんじゃないかね。貧乏はしてたものの、食う位のことは親父が一生懸命働いてくれたからねえ。贅沢な遊びや暮らしはないけど、まあ、みんな同じような、あの、貧乏な、何ですか、あの、隣近所がね。ですから、取り分けて我が家が貧乏であったけど、子供心では分かってなかったんだろうね。どっちかって言うと、素直に、ハングリー精神が育たずに来たんじゃないかなあ。

杉浦伸が子供の頃はまだ父親の佐馬義は瓦屋で特殊瓦を作っており、実際に伸が瓦に係わってくるのは丁度、伊勢湾台風後、佐馬義が独立して家で瓦の道具物を生産し始めてからである。その時、伸は小学校6年であった。伸は当時のことを話してくれた。

私はね、あの、その前に親父一人でこの狭いところで、伊勢湾台風後、瓦の仕事に初めて就いて。瓦屋さんの従業員からね、独立したから。その頃良くこき使われて、この狭いところなもんで、そんな人を雇うほどでもないし。学校から帰って来るとそれこそ、あの、クラブ活動も何もせずにね。あわてて帰って来て家の仕事を手伝ったり、夏休みもほとんどこき使われとったような気がするね。中学校時代も、小学校6年次から少し、もう少しずつね、当てにされて、割と早熟というのか。もう、中学で、あの、体重も身長も止まっちゃったぐらいで。小学校6年ぐらいの時からもう、仕事が間に合ったんじゃないかね。素直な、それこそ、素直な、親の言う通りにね。貧乏は、あの、子供の頃に分かってるもんね。そう、言われるままに。

杉浦伸は小学校6年の時からほぼ父、佐馬義の独立と共に家にある仕事場で父と二人三脚のような形で仕事をして来ていることが分かる。伸が中学校3年の時に佐馬義は鬼瓦の機械化に取り掛かりプレスを導入している。この事がサマヨシ製鬼所の始まりであり、佐馬義が小僧時代に諸般の事情で挫折した鬼瓦の世界へ伸と共に舞い戻ったことになった。伸は中学校を卒業すると刈谷の定時制高校に行きながら佐馬義と一緒に鬼瓦を作っていたのである。仕事の方は佐馬義が深谷定男のところで見た通り、順調に進展して行き、伸の弟2人（正人、公司）も加わり、碧南にある笹山製鬼所とサマヨシ製鬼所の二本立てで平成11年9月まで来たのである。

ここまでの話から分かるようにサマヨシ製鬼所はプレスの白地屋だった。そのサマヨシが様々な要因から黒地の組合へ入ることになる。元々は主に陶器用の鬼瓦を白地として瓦メーカーに納めていたという。ところが、瓦メーカーの使うトンネル窯の中で焼成中に鬼瓦は普通の瓦と厚さが違い、^は爆ぜることが多く、メーカー側がサマヨシに素焼き用の窯を持ち、白地ではなく素焼きにして納めることを要請して来たことが白地から黒地へ変わる発端になった。1980年代になると陶器瓦に押されていた銀色瓦が再度見直され始め、銀色のトンネル窯生産も始まり、それに伴って銀色の鬼瓦、すなわち黒地の鬼瓦の需要が出て来たという。サマヨシは素焼き用のために設置した窯で、結果、需要に応じて黒の鬼瓦を焼くようになったのである。この場合の黒の鬼瓦は手造りの鬼瓦ではなく、プレスによる黒地の鬼瓦なのである。黒地の鬼瓦組合ではその当時異端であった。

そのプレスによる銀色の鬼瓦を最初に認めた黒地の鬼板屋が鬼仙だった。サマヨシは自社の白地を鬼仙に納めるようになり、鬼仙は伝統ある手造りの鬼板屋の中で初めて、プレスの鬼瓦を鬼仙自ら黒地化、即ち焼成を開始したのである。現在では白地のプレス鬼の外注は黒地の鬼板屋では当たり前に行われている行為である。しかし、プレス鬼が出始めた当時は他の黒地の鬼板屋はプレス鬼を「偽物、まがい物」と呼んで手を出さなかったのが実情であった。鬼仙はそのタブーに最初に挑んだ鬼板屋なのである。結果、鬼仙は黒の鬼瓦を生産し始めたサマヨシ製鬼所に対して黒地の組合へ入るように奨めた。別の見方をすると、サマヨシと鬼仙は古くから繋がりがあり、平成11年9月の事件へと続くのである。

興味深いのはプレスの鬼瓦屋であったサマヨシが手造り鬼瓦をここ10年ぐらい前から始めたことである。プレスの鬼瓦への漠とした不安、そして、サマヨシ製鬼所へ手造り鬼瓦の注文が実際に来るとも手伝い、瓦の特殊物に限って、伸自ら手造りするようになったのである。現在は最盛時の3分の1弱になってはいるが、注文は全国から受けているという。プレスと手造りの比率はおおよそ8対2になっており、手造りは主に巴などの復元の特殊瓦である。また白地と黒地の割合はおおよそ9対1になっている。

その本来なら、あの、お客さんからもらった注文を余所へ出してたようなのを自分で。

もう練習のつもりでね、やったりとか。今は積極的に私でやれることならね。あの、それだけでも、もらって来てやるがありますけどね。

まあ、それにしても、あの、鬼瓦っていうのは本当にその幅が広いし、追求すれば奥が深いから、この年になってからはかなり全部を、何でもという、まあ、無理なような気がするもんで。まあ、自分の得手の良いというか、やってて、まあ、そんなに苦痛に感じないような楽しいくらいの線で行けたらいいかな。普通の今までやってるラジオ聞きながら、こうやってプレスをやってるようなそんな気楽さはないね。やはり、ああいう細かい仕事はね。

あるいはもっと大きな仕事、大きなお寺とかの大きな物だったら、もっと大雑把に行けるかなっていう気もあるけど。それはちょっと、あの、そういう仕事にもしり掛かるとそれのみで半月とか経っちゃうもんで、今まだその段階じゃないから、そういった注文がもし来ても、もう余所へね、専属の処へ出しちゃったりもしちゃうけどね。

多くの黒地の鬼板屋が外注にしる、自社生産にしる、大なり小なり、プレスの鬼瓦へ向かう傾向があるのは否定できない。サマヨシはプレスの白地から始まり、プレスの黒地、そして手造りの鬼瓦へという逆の動きをしている。高浜の鬼板屋の中では異色の鬼板屋である。(第15図参照)



第15図
第二代サマヨシ製鬼所
杉浦伸と獅子巴蓋(白地)
杉浦伸作

鬼長

鬼源を興した神谷春義（長男）の弟の一人が神谷長之助である。上鬼栄を始めた神谷栄吉（三男）の次の弟で四男である。神谷長之助は明治25年（1892）に生まれている。長男の春義（明治11年生まれ）とは14歳、直ぐ上の兄、栄吉とは4歳離れている。長之助は昭和39年（1964）、72歳で亡くなっている。長之助は小僧として鬼源に入って、結婚を機に鬼源を出ている。長之助が23歳の頃だという。長之助は養子として浅井家に来たが、浅井家は鬼板屋ではなく、当時は、百姓をしながら、漁師をするといった家であった。最初の頃、浅井長之助は親方であった春義の鬼源へ白地を作って納めていた。25歳の頃になって、「鬼長」として正式に独立したという。

鬼長は当主の入れ替りが多く、現在、六代目浅井頼代が鬼長を継いでいる。頼代は三代目邦彦の妻であり、長之助のことを直接知っている者の一人である。しかし、頼代が邦彦の元に嫁いできて8ヶ月ほどしか長之助とは一緒に暮らしていないので、頼代による長之助の話は他の人を通しての逸話になっている。ただ逸話の人物になるような要素を多分に持っているのが、長之助である。何故なら高浜のシンボルとも言える観音像は長之助が約4年の歳月を費やして製作した物である。観音像本体だけで高さ8メートルあり、台座を入ると14.5メートルにもなり、陶管製の観音像としては何と日本一なのである。衣浦大橋の袂にあるかわら美術館の野外広場から目に入るほどの大きな物で、丘の上に立つ観音像は独特な美しさがある⁶⁾。焼き方は鬼瓦特有の燻し銀ではなく、土管焼きの赤茶色をしている。完成したのは昭和34年であり、その頃、高浜では瓦産業と並んで土管産業が盛んであったことを示している。長之助は大物を作るのが得意だったらしく、高浜市の大山公園には高さ5.2メートルの大きな「狸」が建っている。やはり陶管製の物で圧倒的な存在感がある。

さて頼代による長之助の逸話であるが、観音像にまつわるものである。

寄付というよりも、まあ、貰ってもらったんですよ。まあ、高浜にお嫁に出したようなもんですよ。(笑い) お爺ちゃんも、この、これが、な、な、7メートルだと聞いてるんですけどね。これの数が72個に切れてるという風にも聞いてます。まあ、ほんでも、お観音さん、72切って、せめて自分の生命も72ぐらいまではね、生かして下さいという念願を込めながら作ったって言って、後で笑い話で聞いたけど、矢張り亡くなった時も72歳だったんです。(第16図参照)

長之助は観音像や狸の他、瓦組合の大黒さん、大山田のお地藏さんなど、色々なところに大物を作っては商売抜きで寄付をするようなところが多分にあったらしい。頼代はそういった長之助の創作にまつわる裏話であるデザインの仕方を少し語っている。



第16図 観音像 浅井長之助作 高浜市観音寺境内（陶管製観音像として日本一、高さ8メートル）

得意というと、矢っ張り、そういう、今も家には色んな原型があるけども、まあ、こう、手造りで、形の、もう、イメージして、デザインをして、まあ、あの、良く手帳や何かを持って見えてね。あの、パッと目を、イメージが湧くと、夜中でもデッサンするっちゅうことは聞いてたんですよ。そういうデッサンした紙切れとか何かがね、色々、有ったんだけどね、引っ越しする時に、きっと、どっかへ片付いちゃったか。もう、今探してみても分からなかったもんで。

まあ、矢っ張り作るのが好きだね。動物園行って、もう、じーっと、お弁当持って動物を見て、象なら象をね、一つ見て、自分でデッサンして、家に帰ってそれを作って、原型を作ったり。だからそういう原型が未だに家にありますけどね。（第17図参照）



第17図
初代鬼長 浅井長之助

このように、頼代を通して語られた長之助は商売っ気が余り無い、職人氣質というよりも芸術家肌の鬼板師だったようである。長之助の残した数々の大物と共に浅井長之助の名は長之助亡き後も語り伝えられていることが分かる。一方、鬼瓦は確かに屋根の上に残っていくのであるが、鬼瓦が屋根から降ろされない限り誰が作ったのなかなか分からない。長之助のような大型のモニュメントは完成すると私的な空間から公的な空間に移ることが多く、製作者の名前がモニュメントと共に語り伝えられていくのであろう。ひと度、モニュメントがシンボル化すると、人口に膾炙され、土地の記憶に刻まれるのである。(第18図参照)



第18図
狸 高浜市大山公園内
浅井長之助作
(陶管製, 高さ5.2メートル)



第19図
第二代鬼長 浅井道夫



第20図
お亀 浅井道夫作

鬼長の二代目が浅井道夫である。道夫は大正5年（1916）に鬼長に長男として生まれている。そして平成13年3月28日に85歳で亡くなっている。フィールドワークをしている時に会えることが可能であったにもかかわらず、残念ながら道夫には会っていない。現在は写真と、頼代のインタビューを通して道夫を知るのみである。頼代によれば、長之助が「鬼長」の暖簾のれんを作り、道夫が「鬼長」の土台を築いてきたという。次の会話がその事を良く表している。

高原：じゃ、（長之助さんは）商売抜きでやられるのが好きだったんですかね。

頼代：そうなんですよ。だから次の代の道夫さんという方が、今度は一生懸命、また、そのフォローをなさったという事なんです。だから、お爺ちゃんは色んなところに、色んな物を寄付して暖簾を作っていたんだけど、今度は矢張り地固めで、道夫さんの場合がね。割合、仕事、仕事、仕事という感じみたいだったねえ。（第19図及び第20図参照）

また一方、道夫の息子の邦彦が昭和57年（1982）に40歳という若さで他界している。その時、66歳であった道夫は、邦彦の後を引き継いだ頼代の実質的な後見人として鬼長を支えて来たのである。このように芸術肌の父、長之助と、未完成で夢半ばして早くこの世を去った

息子、邦彦の間に立つ二代目鬼長、道夫は鬼長のために苦勞をした人のように思われる。道夫の時まで仕事場は現在の新しい本宅の場所にあり、そこで、手造りの鬼瓦を製作していたのである。しかし、邦彦の時に金型のプレスによる鬼瓦の大量生産に移るため、二池町の現在の工場へ新しく進出している。つまり、道夫は長之助による手造りの伝統と、邦彦による鬼瓦の機械化という二つの流れの橋渡しのような役割を演じたことになる。道夫に対する頼代の評価を見てみたい。

この人（道夫）も結構一刻でね。融通がなかなか利かないタイプなんですよ。でもまあ、なかなか頭の切れる方だったもんで。矢っ張り仕事の打ち込まれる方でしたかね。50そこそこぐらいで、ちょっと病気をって言うか、あの、昔でいう中気の発作が少し出て、それからまた回復して、まあ、70歳ぐらいから寝込まれて、13年目で亡くなって、満83ぐらいかな。83か84ぐらいの頃にね。ま、矢っ張り、この道夫さんの代では地盤固め、鬼長さんの地盤固めをしたんですよ。

三代目鬼長の浅井邦彦は昭和17年（1942）に生まれ、昭和57年に亡くなっている。40歳になったばかりの時であった。この邦彦の代に鬼長は大きく質的に変化した。金型プレスによる鬼瓦生産の機械化を開始したのである。道夫が手造りの職人だったので、当然、息子の邦彦も手造りを期待されたと思い頼代に尋ねてみた。

結構やってるんですよ、手造りも。あの、色んな物を。この人も、常滑窯業学校出てるもんで、ま、薬にしても、手で作る物にしても、一応学校で習ってきて、ま、跡取りとして家で作るは作ってたんです。

でも矢っ張り若いだけに、その、先、先のこと気がなるもんで、やっぱ、プレスを入れて、矢っ張り生産しないと、あの、世の中に置いてかれちゃうかなとか。そういう雰囲気、ま、プレスを入れてやってみようと。だから、以外と早くプレスを入れたんですよ。まだ皆さんが手でやってる時代にね。

道夫による手造りの伝統を旧工場に残しながら、新工場で金型によるプレスの鬼瓦を量産する体制を整備していったのが邦彦であった。家内工業的な鬼板屋から近代的なプレス工場へと鬼長は変貌を遂げる。その発端を開いたのが邦彦と言えよう。やはりそれには邦彦本人の性格が多分に影響しているようである。（第21図及び第22図参照）

この人ね（邦彦）、矢っ張り、この人の場合はね、お父さん、温厚な方で、結構、社交的



第21図
第三代鬼長 浅井邦彦



第22図
小便小僧像 浅井邦彦作

な人だったもんで、色んな、こう、何かを、こう、切り替えてやりたいタイプだね。新しいもんにも挑戦もしてみたいわ。矢張り、時代が違いますもんね。だから割と、早く早くという感じなんですよ。

邦彦の後を継いだのが、頼代であった。四代目鬼長に邦彦の嫁であった頼代がなったのである。邦彦が亡くなった時、道夫がまだ健在で、頼代の後ろに付いたのである。

まあ、お父さん（道夫）が「やれや、やれ」と。「まあ、自分の力も、年も来てるから、やっていけると思えばやりゃ良いし、無理だと思ったら、何時でも早めに言ってくれ」という事で。

鬼長となった頼代にとって道夫の存在が大きな支えになった事は否定できない。それにもう一つ大きな要因が頼代を鬼長たらしめている。頼代は昭和18年（1943）に当時、瓦屋であった石川家に生まれている。父である石川英雄は元々、鬼板師で戦争中に瓦屋に変わっていたのであった。ところが頼代が15歳の頃、英雄は鬼板を再開し「石英」という鬼板屋になっている。つまり頼代は鬼屋の娘であり、その娘が別の鬼屋へ嫁いで来たのである。頼代はこのような二重にも三重にも鬼板師の世界に取り囲まれて生活をし、成長して来ており、通常の

女性とは環境が特殊であったことが頼代を鬼長たらしめていると言えよう。頼代はその辺りの事情を語ってくれた。

ま、ほいでも、私の兄弟も、実家もみんな同じ商売しているんですよ。だから、あの、意外とやって来られたんです。私の父（浅井道夫）も鬼板師だし、鬼源さんからで、奉公して、ほで、自分、職人として鬼を作ってって。で、うちの実の父（石川英雄）でも瓦屋さんが自分の父。自分の親は瓦だもんで、で、瓦屋やって、途中からまた、矢っ張り鬼板がやりたいって事で、鬼をやって、今は同業者という形になっているんですけど。

以上、二つの要因は頼代にとってかけがえのない物であるが、頼代が鬼長を継げた最大の要因は邦彦が早々に、手造りによる伝統的な鬼瓦の製造からプレス生産による鬼瓦の量産体制に切り替えていたからである。邦彦の代で既に職人が働く鬼板屋の親方から、従業員を抱える工場の社長へと質的に変容していたのである。頼代はこの点について次のように語っている。（第23図参照）

ま、この人（邦彦）の場合は、やはり転業。転業と言っても鬼を辞めたわけじゃないですけどね。まあ、矢っ張り、時代の波に乗ってかなということで、ま、それで、今が在るんですけどね。



第23図
第四代並びに第六代鬼長
浅井頼代

その時に手造りだけでやっとならば、細々と手造りをやって。職人のような方で、もう、技術がある人は、自分が作らなければ駄目じゃんね。その方が作らなかったら、もう、それも死んでしまうけど。矢張り、こう、金型でプレスするっちゃうのは、従業員さんがやってくれる。だから、まあ、その点、まあ、大変は大変ですよ、見込みで作るから。生産、出来過ぎちゃう場合もあるし。

今なんか、本当に、ちょっと不況気味だもんね。単価が安いし。まあ、作ってるものに關しては、何とか今は、うちの場合はね、まあ、頑張って売ってくれてるもので、助かってますけど。矢張り、単価が厳しいですもんね。まあ、でも、こうやってプレス入れて、何人か使ってやるというのも一つの手ですから。

四代目鬼長、頼代は邦彦の後、昭和57年（1982）から鬼長を盛り立てて来た。鬼長は平成8年（1996）に頼代の娘婿として鬼長で働いていた寿美正（仮名）に社長職を譲っている。1999年9月2日に鬼長本宅でインタビューした際、鬼長として会ったのは寿美正であった。寿美正は昭和39年（1964）生まれで、西尾市のサラリーマンの家庭に育っている。鬼板屋とは関係のない世界の人間である。寿美正は自分自身のことを次のように語っている。

小さい時からやっぱり、目立ちたいなと。人とは違うことをやりたいなと。矢張り自分で作った物とか、自分の物を、こう、世間にこう、アピールしたいなと。……というのが非常に強かったかなあと。何事もやるなら、ま、真剣にやるって言うような、そういう性格かなあ、という。ま、ほいで負けることが嫌いだった。

矢張りソフトボールしようが、何のスポーツしようが、矢張りこう、自分の納得行くまでやって。負けても、まあ、悔いの無いような形を取ってきたいなと。実際には、そういう試合でも、試合は負けたんだけど、自分自身というか、みんなとね、やってみて、「あー、あそこまでやったのに」と、いわゆる高校野球じゃないけど、そういう形で今までやってきたという状況じゃないかなあと思うんですよ。

中途半端なら、辞めるかやるかというのをはっきりとした方が、ま、『Yes か No か言える日本人』じゃないですけど、ま、そういう感覚でやってかないかなあと今でも現状思っていますし、小さい時もそういう生活をしてきたというのが。ほんで、今現在に至っていますけどねえ。

この寿美正の性格が後に鬼長を大きく変革させていくことになる。寿美正は高校を出ると2

年間専門学校へ行き、歯科技工士になっている。しかし、歯科医院に3日勤めて辞めている。そして24歳まで西尾の不動産屋で分譲住宅を売っていた。この仕事は寿美正自身の性格に合っていたという。

不動産屋に行って、自分でも仲買だとか、そういう事が、矢張り年を食ってもずっとやれるなあと。こういう商売だなあと考えてこっちから行って、まあ、頑張ったというのかね。

だから、その時に相当日本のバブル絶頂期ですから、もう売れて売れてしょうがないという、そういう時代に乗ったという。だから20歳にしてすごい給料も貰っちゃったし、そういう歩合制というのかな。自分自身が頑張ればそれが跳ね返ってくると。だから自分と性に合ったという事ね、性格にね。

この寿美正が24歳にして鬼長に縁があり、養子として入ったのである。寿美正は元々鬼瓦の世界には縁のない人間なので、結婚する前に「マサヨシ」という別の鬼屋で下調べをして、鬼瓦の世界に入ることを決めている。自ら職安に行き、面接を受け、マサヨシで半年勤めたのである。他の鬼屋で働きながら、鬼瓦業界での可能性を測ったのである。「行けるな」と思ったという。

やり方によっては。というのは、この業界に来て、矢張り不動産屋へその時いたもんですから、ふと、この業界に来て、何か、江戸時代か、その、随分昔に戻っちゃったなあと、そんな感じが……

今、いい家を造ったって、プレカットでビャーッと全部出来ちゃうような時代の中で、へらを舐めてやっとなると。いや、これはね、値段的なもんはそんな時はあまりわからなかったですけども、やり方によっちゃ、これは非常に面白いなあというのも一つあったと。という事で、「やろうか」と。

寿美正は鬼長に入った平成元年（1989）当時の鬼長の様子を語っている。

ここへ来た時、もう親父さんが亡くなって13回忌になってたもんで。まあ、お客さんとしても、まあまあ有ったし。そういうような設備もしなくて、従来のまんまで行こうという形だった。

入った時は、うちも6名ほどしかいなかったと思いますけどね。プレスが確か、プレスをやってるのがやっぱ4人で、手造りをやってるのが2人。そういう現状だった。だからまだまだ小さかったんですけども。大きな工場にそいだけの人間しか居らんと。

この寿美正の言葉から邦彦が行った鬼長におけるプレス導入の規模が推定できるし、同時に邦彦の後を引き継いだ頼代の経営方針も分かるのである。寿美正に言わせると、「親父さんが亡くなって、そういう設備投資をされてなかったもので、あの……そんだけ遅れちゃつとるという現状だったです。」ただその時、その様子に逆に可能性を見出しているところが、チャレンジ精神があり、負けず嫌いな性格の寿美正の面目躍如たるものが窺える。

でも、まあ、亡くなった親父（邦彦）というのは非常に、その、先見の明があったなあと思いますよ。その時に思えばね。敷地もトンネル（窯）が築けて、鬼瓦もトンネルで焼成出来るという、全て考えて土地を買っていたという。だから、その点が僕にとってはずごい有利な点だったなあと思いますよ。

土地を買って建物造ってやつとると、すごい膨大なお金が掛かっちゃうけども、そういう物が非常に他社に比べて大きかったと。だから、中をうまくこういう風に利用すれば、早く勝負が出来るかなと。というのも、全部見て、これなら行けるだろうと。

寿美正の慧眼は単なる従業員の目ではない。事業を目指す者の目である。寿美正はこのビジョンを元に鬼長を大々的に変革していく。このビジョンの基になった鬼屋が「マサヨシ」である。寿美正の鬼瓦業界全般の第一印象が「江戸時代に戻ったような所だった」というが、それを踏まえてマサヨシを「昭和の会社」と呼んでいる。そして寿美正本人は実際に鬼長を「平成の会社」にすることを夢見ていたように思われる。

非常に僕は運が良かった。まだ昭和の初めじゃないけれども、昭和の会社に行ったもので。他社に比べて。考え方。あそこの社長の、「マサヨシさん」とこの社長の考え方というのは矢張り優れている。

あのね、チャレンジ精神が非常に多くて、個性が強くて、色んなものを考え出してそれを製品化して、今でもやっているんですけど。色んなものを考えて、ニーズに載せようという事で努力している。今までのものを従来通り作っていいわという考えじゃなくて、そういう考えを持ってたもので、非常にそういうのは、半年間だけでも、「あー、なるほどな」と、役立つとるという部分があると。

寿美正は「マサヨシ」に他の鬼板屋にはない、現代的な会社のイメージを見出している。寿美正の言葉で言うと次のようになる。

今までのような物を作とって……魅力を感じないというかな。だから若い子が来ても勤まらない。職人の職業みたいなもんで。矢張り、こう、叩かれても、「お願いします」という情況じゃない、という。だからもう続かないと。だから、もう、会社らしくして行かないかんなど。

寿美正は鬼長に入って急速に仕事を覚えていくと、やがて鬼長の変革に乗り出すのである。まず行ったのが最新型のプレス機械の導入であった。開発されたばかりの機械で日本でも、島根県と三州の鬼長のみといったような物だったという。本来大量生産を目的とした機械がプレスなのであるが、それをさらに効率を上げ、生産能力を高めた物である。これによって鬼長は白地の生産が三年間のうちに7倍に伸び三州ではトップになったと言っている。

この新型プレス機械の導入の背後には寿美正の基本的な戦略がある。次のように寿美正は言っている。

矢張り生産上げようと。そして逆に僕の考えとしては、そういう……その品物が随分有るんですけど、何百種類とね。そんな中でも一番安い、一番大量に出る物、皆のやりたくない物、それを、それで儲けようと。僕の考えはね。

だから皆がやりたくないことをやって、如何にそれで儲けるか。後はそれが、儲ければ、後は何を作ったって儲かると。

「発想が逆ですねえ」というと、

うん、逆の発想で行くの。普通は儲かるもんから順番にやってって、儲からんなら辞めようと思うけれども。僕は儲からんもんを先にやると。それを大量に作っちゃう。

当時は7倍作っても、まだ足りないくらい鬼瓦が売れたという。ただ寿美正の発想を実行するには新しいプレスと新しい金型の導入が必要となり、設備投資を控えてきた鬼長の従来の方針とぶつかり内部で葛藤があったのは確かである。寿美正は単に新しいプレス機械と金型を入れただけではなく、金型自体の改良を同時に行っている。今まではたくさんの種類の金型が全て違っていたために、金型のプレスへのセッティングが煩雑になって、ひどい場合はそれだけで半日仕事になるようなことがあったという。それに対して寿美正は全て金型も規

格にして、何を入れてもそこにしかはまらない式の物に仕様を変更させている。これによって、30分も有れば金型の据え付けが出来るようになり、あとリフトが操作できれば誰にでも動かせる体制を作り上げている。

この改良によって、寿美正は日系ブラジル人の大量導入を図っている。鬼瓦業界の中では初めてのことで、多いときは16人ぐらい働いていたという。日系ブラジル人の採用は実に象徴的な出来事で、その背後にはやはり寿美正の戦略が光っている。

とにかく僕が考えてるのは、そこに歩いとる人が、このボタンを押して、「うん」という形でやれるような仕事をね、やれるような機械を入れていかんと。

鬼瓦だと特殊ですもんね。うちの、うちんちの仕事っていうのは。それが誰でもやれるようにするにはどうしたらいいかなっていう事で、色々考えなあかんのだけども。それをやったって所が勝ちだったと思う。

導入した当時の鬼長へは、全国から問屋さん、工事屋さんたちが見学に来たという。観光バスで来る団体もいたらしい。それほど業界では斬新的な鬼瓦屋になったのである。新しい機械と新しい人員を整えた寿美正はさらに機械の稼働率を上げるために三交代制を採り、フル稼働の状態に持っていつている。

朝は6時からね、10時も休憩しないで、6時から来たら昼12時で交代して、12時の1時間も止めないと。一班・二班に分かれて、今まで鬼屋さんで考えられんような。うん、一班・二班交代にして、要はね。12時に交代して、12時1分からその二班が来て、またやると。6時までね。6時からまた10時までまた三班がやると。

寿美正はブラジル人の大量導入に伴って管理体制も変えていつている。旧来の鬼板屋では職人は先輩の仕事ぶりを見て盗んで覚えるのが一般的であり、職人が直に「教える」という事は基本的には余り無い世界なのである。ところが寿美正はまず機械を一新した後に、仕事の出来る人を管理者に立て、作業場に置き、不慣れな人を見て助けるシステムに変更していつたのである。

こういった一連の変革は一言でいえば「合理化」を徹底して追及していつた結果なのである。寿美正はこの考えに同意し、続けて次のように述べている。

無駄が非常にこの業界多いと思いますよ。その、荒地って元から、あの、製品になるまでが。人間の手が何回触られるかっていう。そういう品物がね。触れれば矢っ張り、

十円損すると。触れなくてどうしたらいいかって。

「合理化」とは正に「人の手を如何に省くか」であるから伝統的な鬼瓦の手造りの技を出来る限りからで覚えて行く世界とは文字通り逆転している思考様式である。

寿美正は鬼長へ入ってから仕事を覚えるや次々と鬼長の変革を成し遂げてきたのである。平成8年(1996)に寿美正は頼代と代わって五代目鬼長になっている。鬼長になって寿美正が行った重大な変革がある。鬼長はそれまで邦彦が導入した鬼瓦のプレス生産の道を踏襲し、寿美正が鬼長に入ってから本格的に設備投資に乗り出し、鬼瓦のプレス生産による極大化・合理化を図ってきた。ところが寿美正はその鬼瓦の生産を中止し、「一番安い、一番大量に出る物、皆のやりたくない物」である平板瓦の道具物(三叉、カッポン、巴など)に一気に切り替えたのである。

現在でこそ平板瓦に大手ハウスメーカーが転換し、逆に和瓦は平板瓦に押されて割合が7対3といったような状態にまで変化して来ている。その発端になった事件が1995年1月17日の阪神淡路大震災である。全半倒壊家屋20万9千、第二次大戦後、日本最大規模の災害であった。しかもメディアが空から被災地を撮影、放映したため、倒壊家屋は黒瓦(和瓦)に押し潰されたような形になって見えたのであった。あたかも和瓦の重さが家屋倒壊の直接の原因のような印象を全国的に与えてしまったのである。それまで大手ハウスメーカーは屋根にカラーベストを使っていたが、通気性の悪さや変色、さらに材料のアスベストが体に有害と言われ始めたことも重なって、和瓦に比べて小振りの粘土製の平板瓦が少しずつ出るようになったのである。和瓦離れがこの時始まったのであった。

寿美正はこの動向を他の鬼屋に先駆けて見抜き、既に投資してあった鬼瓦(和瓦用)の金型を全て外して、平板の道具物へ切り替えたのである。平板の道具物とは和瓦による伝統的な鬼瓦を意味しない。それは平板瓦の特殊瓦にしか過ぎず、鬼瓦と比べるとその余りのシンプルさに拍子抜けするほどである。事実、寿美正は初めて私が電話した時に鬼長として対応しながら、「うちはまだ鬼瓦屋じゃないですよ」と答えている。鬼瓦から平板の道具物に変わった頃は他の鬼瓦屋から次のようによく言われたという。「あいつは鬼やらんどいて、何を作っとるだ」と。それに対して寿美正は「何年後かには笑う時が来るだろうな」と思っていたという。インタビューした時は1999年であり、その時にすぐにこの言葉に付け加えて、「今、現状、来たわけですよ。3年で」と答えている。

当時は同業者から散々けなされた模様である。しかし、寿美正の自信は揺らぐず、その根拠を語っている。

プレスも買わないかん。金型もまた作らないかん。でも、まあね、何時売れるかわからん。「あんなものは売れるわけねえじゃないか」と皆から言われたけども、僕はまあ、そ

れを信用して作ったけども。

どういうことかって言うと、これはニーズにあつとると。一つは、昔、不動産屋に居た。そういったところから、色んな情報貰って来る、と。だから、鬼屋さんっていうのは、矢張り職人なんだもんで、自分の高浜市しか分からないわけですよ。うん、自分が使うなら良いですよ。それがいるか、いらんのか、分かってないという。だから僕は不動産屋色々知っとるもんですから、そういうとこ回って、「どうだろうか」とか。そういうもの先回りして、「これなら行けるぞ」、と。

結果、始めた時は生産したうちの1割しか売れなかった平板の道具ものが、当時では考えられない量出るようになったのである。

大手ハウスメーカーが使うことによって、どんどん、トレーラーじゃないんですけども、引っ張られていっちゃうんですわ。要は、平板に。その、小さなビルダーまでが矢張り平板が良いという形になっちゃう。何でかっていうと、そういうハウスメーカーが展示場どんどん、どんどんと作って行って、矢張り建て替えをするもんですから、どんどん、どんどん平板に。和型から平板に変わって建て替えをしちゃうと。

お客さんは展示場に見に行くと。ほうすると、屋根なんか見てないんですけども、「これで、じゃあ決めますよ」というと、屋根が必然的に平板になつとると。うん、だからもう、すごい量流れて行っちゃうと。

1999年の時点で寿美正は平板の道具物と鬼瓦の比率を6対4と言っており、2003年の現時点で7対3と一般に言われている状態を考えると、寿美正の洞察が如何に鋭いものであったかが分かる。しかも、寿美正はその考えを実行に移しているのである。もちろん鬼長は平板瓦の道具物の先駆者として独占的な利益は得ている。ただ他社も平板の道具物へ進出して来ているのも事実である。寿美正は平板の道具物に大胆に転換をしたのであるが、一方、手造りの鬼瓦は残しており、その存在価値を認めている。

(ハウス)メーカーさんがそういうような動きをされてるもんで、瓦メーカーさんもね。僕たちも当然その、下だもんで、変わらざるを得んというのが現状なんですよ、要は。だから、そこで我を張とったって、売れないものを作とったってしょうがないっていう事です。



第24図
家紋（浅井長之助伝来の
屋号「長」） 浅井頼代作

古代鬼面雲足付玄閼鬼
浅井家本宅
岩月光男作
(鬼瓦の「鬼」と家紋の
「長」で「鬼長」を表す)

うん、それにいち早く乗かって、そういうものはそういうもので対応して。重要なものは重要でね、高価なものは高価なもので、矢張りそれは存続せないかなと。二極化で行かないかなということですよ、要は。

寿美正は「二極化」という言葉にある通り、鬼長を平板の道具物へと大転換はしたものの、初代鬼長の長之助から続く、伝統的な手造りの鬼瓦の部門をしっかりと確保している⁷⁾。鬼長は長期的な視点から観ると、三代目鬼長、邦彦の採った路線を現在も維持していると言えよう。

・2003年の夏に再度、鬼長を訪れた際に驚かされたことがあった。鬼長であった寿美正が、平成13年(2001)に鬼長を出て、頼代が現場に復帰して六代目鬼長になっていたのである。こういう事に会おう度に、本当にフィールドというのは常に変化しているのだと実感させられる。そして、文化を知るには文献中心ではなく、常にフィールドに立ち返らなければいけないと思わずにいられない。

寿美正は鬼長を出る際に顧客と従業員を引き抜いていったので、従業員は30数名のかつての規模から17名になっている。それでも寿美正が鬼長に入った当時の6名と比べると鬼長が質的に伝統的な親方中心の鬼板屋から、現代的な会社組織になっているのは明白である。鬼長は変革を繰り返しながらも、伝統を保ちつつ、近代的な鬼板屋としての「平成の会社」に脱皮したと言えよう。(第24図参照)

神谷春義・岩月仙太郎系(1)では神谷春義に端を発する4軒の鬼板屋について見てきた。その内、鬼源、上鬼栄、鬼長は神谷春義、神谷栄吉、神谷長之助(後に浅井長之助)という血で繋がった兄弟によって興された三州では伝統ある鬼板屋として現在に至っている。三人の

兄弟が、長男であり親方である春義の元で鬼瓦を作っていた頃は一つであった。しかし、栄吉と長之助が独立し、代を重ねるにつれて各々特色のある鬼板屋へと発展し、変化して来ている。神谷春義系の共通する特徴はそれぞれの家で窯業学校を卒業した親方を輩出したことであろう。第二代鬼源神谷勝義、第二代上鬼栄神谷知佳次、第三代鬼長浅井邦彦がそうである。窯業学校から神谷春義の系列に導入された技術と思想が石膏型の技術であり、近代化・合理化・大量生産の思想であった。伝統的な手造り鬼瓦の世界がこういった世代の登場によって急速に変容していったのであった。その影響力は想像以上に大きく、系列を越えて他の鬼板屋へと三州を中心に広がっていったのである。

神谷一族とは一線を画するが、数奇な流れを辿ったのがサマヨシ製鬼所であった。初代の杉浦佐馬義が上鬼栄の神谷栄吉の小僧として僅かな期間働いたのをきっかけに、鬼源の職人であった深谷定男、鬼仙の岩月清などの影響を要所所で強く受け、神谷春義・岩月仙太郎系の衛星国的な鬼板屋として存在したのである。サマヨシ製鬼所の存在は三州で新興の鬼板屋がいかに興っていったかの一端を物語っていると言えよう。

(本稿は愛知大学研究助成による研究の成果の一部である)

注

- 1) 愛知県高浜市には「上鬼栄」と「鬼栄」という鬼板屋が在り、どちらも似た名称なので、通称は「上鬼栄」を「上^{かみ}の鬼栄」、「鬼栄」を「下^{しも}の鬼栄」と呼んで区別している。
- 2) 深谷定男は当時は鬼源の職人であったが、鬼源生え抜きの職人ではなかった。鬼源へ来る前は鬼宗という現在は存在しないが、鬼源から直ぐ近くにあった鬼板屋の職人だったという。それ故、鬼源は純粋に春義から技術が伝わっているというよりも、博基の時に「鬼宗」からの技術が深谷定男と通して入っていると言える。
- 3) 勝義は石膏型の技術を若い頃学んだ瀬戸窯業学校から取り入れている。その技術が鬼瓦の世界に普及している現状を見ると、「三州粘土文化圏」における現代の代表的な例として考えることが出来る。つまり基本的な技術は応用を通して繋がっているのである。
- 4) これはあくまで原則として言えることである。例外として、A鬼屋からB鬼屋へと石膏型の持ち出しはあり得る。特に起こりやすいのは、A鬼屋から職人が独立する時、または他の鬼板屋に移る時であろう。また海賊版としての無断複製も考えられる。
- 5) 何時独立したのかは、はっきりしていない。伝聞によれば、長之助は大正4年(1915)に結婚し、同時かまたは2年ぐらいたって独立しているらしい。栄吉は大正12、3年頃独立したという。つまり、栄吉の方が職人生活は長之助よりもはるかに長い。
- 6) 観音像は栲護山観音寺の境内にあり、このお寺自体が小山の上に立っている。この山の名称はない。地元の人達はこの像を「高崖の観音さん」とか、「森前の観音さん」と呼んでいる。
- 7) 現在、鬼長には2人の手造り職人がいる。その2人は鬼仙で働いていた職人の岩月清の兄、岩月光男と光男の息子の実である。鬼長は手造り部門を保持しているとはいえ、手造りに関しては鬼長の伝統は実質上、途絶えていると言っていると思う。また逆に、鬼仙の手造りの伝統が鬼長に接ぎ木されているとも言える。ただ鬼長は元を辿れば鬼仙に行き着くので、本家帰りをしたとも解釈できる。

参考文献

- 石田高子 1983『菱のうた』愛知県陶器瓦工業組合
駒井綱之助 1963 粘土瓦読本 彰国社
三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合 2000『三州鬼瓦総合カタログ2000年度版』三州鬼瓦製造組合・三州鬼瓦白地製造組合
吹田市立博物館 1997『達磨窯』吹田市立博物館
杉浦茂春編 1982『高浜市誌資料(六)』高浜市
高浜市伝統文化伝承推進事業実行委員会編 2003『鬼瓦をつくる～愛知県高浜市の三州瓦～』高浜市
伝統文化伝承推進事業実行委員会
高原隆 2002「鬼師の世界—三州鬼瓦の伝統と変遷」『文明21』第9号, 227～247
2003「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(1)—」『文明21』第10号, 163～189
2003「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛(2)—」『文明21』第11号, 81～132
山下晋司, 船曳健夫編 1998『文化人類学キーワード』有斐閣
ONIX 1992『鬼瓦総合カタログ』ONIX